
戦国BASARA 月の姫の戦場

風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

戦国BASARA 月の姫の戦場

【Nコード】

N7152R

【作者名】

風

【あらすじ】

なぜかBASARAの世界にトリップしていた（自称）オタク女子高生。元の世界に帰りたいという彼女の願いの為に次元の魔女が求めた対価は、《この世界を正しい結末へ導くこと》だった・・・。

アニメ一期をベースにオリジナル展開していきます。ご注意ください！ BASARAさえ知っていれば、ホリックを知らない方でも見て頂けるはずです。ネタ、パロディ程度に他作品の話も出てきます。 まだまだ先ですが、オリキャラとBASARAキャラとの恋愛シーンが入ってきます。話が進むたびに作品が女性向けになっ

ていくと思いますので、苦手な方は閲覧されない事をお勧めします。

其の壱 始まりのモリ（前書き）

初めまして。文才は欠片もありませんが、ついカッとなって投稿しました。

感想など頂けると嬉しいです。

それではどうぞ！

其の壱 始まりのモリ

目に差し込む光が、痛い。

「……ん？」

その光は木々の葉から漏れる木漏れ日だと気づくまで、数秒。どうやらここは森の中のようだった。何がどうしてこうなったかは知らないが。私は今、何処とも知れない場所で仰向けに寝っ転がっていた。

「……！」

やべえ！今日ナ トの録画予約すんの忘れてたんだっ！走って帰れば間に合うか！？ああでもあの時間帯は兄さんがWi でテレビ独占してるはず！ちくしょうあのバカ兄勉強しやがれこんちくしょう……！

「むおおおおお……！そうなりゃこんなところでまったり森林浴してる場合じゃねえ……！チャッチャと帰るぞ……！」

うりゃっ……！と勢いをつけて一気に立ち上がる。そして服についてる土をはたき落そうとして、……ふと手が止まった。

そういや、私下校途中だったよね？それなら必然的に着用している物は制服のはず。

でもこれ、かなり際どいけど和服だよね？何か現代っぽいアレン

ジだけどカテゴリーは着物だよね？

それに、なんじゃこりゃ。私、いつの間にコスプレ用の刀差してきたんだろ。あと何だいこの質量、適度に重い。

「…！」

いや、まさかね？ないでしょそれは。ここは三次元だ、そんなフアンタスティックな事は存在しない！二次元の住民の夢にはとにかく厳しいのが少子超高齢社会を駆ける日本ないし世界の常識！はははそうさこれは夢さ！夢、夢、夢！！

…だけど、一発叫ばせてほしい。

「ギョウゴギョウゴ…！」

なぜだろう。山中じゃないのにエコーがかかった。

とにかく動かなければ始まらない。

ってことで、森の中を探索し始めて数分後。難なく抜け出して今現在、行き着いた近くの農村をぶらぶらと歩いている。

周りに洋服を着ている人は皆無。みんな時代劇で見るとような服装だ。

最初は映画村だと思おうとしたけど、どうやらそうでもないみたい。なんていうかこの、生活感溢れる風景と空気は作り物の村とは全く違う。空気はおいしいし、何より何処にもビルやなんかの建物の姿がない。

…てなわけで、『いつの間にか気を失って歴史オタに連れ去られ、コスプレまでさせられたはいいが急に心変わりされ、京都のテーマパーク付近でポイされた』という、無理矢理感はあるがまだまともな説明は成り立たなくなった。それと、ここが現代かってことも怪しくなってきた。

そうなるよ、やっぱり最初に考えた答えに行きつく。

「タイムスリップか、異世界トリップかな……」

誰にも聞こえない程度に呟いてみる。

非現実的で夢見がちにも程があるけど、口に出して言ってみると
そうなんじゃないかと思えてくるから不思議。

「もし前者ならこいつは何時代だ？私、刀持ってるし、武士の時代
だと仮定すれば鎌倉から江戸くらい？後者だと何処にトリップした
んだろ？無？薄 鬼？どっちも詳しくないからそうだと厳しいな
ー。どうしよー」

……………。

どんだけ冷静なんだ自分。

ちったあ驚けよ。

ぐうつと伸びをして、お天道様を見上げる。

「まあいいや！ぐだぐだ考えてもどうにもなんないし！それにこー
やって歩いてれば厄介事の方から、」

「キヤアアアアアアア！」

「……………」

ほらね。やって来た。

其の壱 始まりのモリ（後書き）

オリキャラしか出てねえ（＾q＾）　そしてこのありがち展開である。

次ではバサラキャラ出します、すいません！

其の弐 燃ゆるミタマ (前書き)

ありがち展開その2。

しばらくこんな感じかもしれません。(オイ

其の貳 燃ゆるミタマ

「おっさんたちどこの兵だよ！？ここはお館様の国なんだぞ！帰れ、とつとと国に帰れよ！！」

「小僧！！我らに口答えするとはいい度胸だな！！いいだろう、その生意気な面ごと切り裂いてくれるわ！！」

「キヤアアアアアア！！」

人の波を掻き分け、叫んではつかのお姉さん方を押しつけ駆けつけると、いかにも柄の悪そうな侍さん多数と男の子が睨み合っていた。男の子の足元には、額から血を流す女の人が倒れている。

…ちよつと、洒落にならないっぽい。

「！！」

男の子の真正面に立つ侍さんの鞘から、鋭く光る刃が抜かれた瞬間、野次馬たちがあつと息を呑む。

「ま、待って！本当にごめんなさい！だけどお願い、この子は許してあげて！！」

「今更何を言おうと遅いわ！！さあ、二人で黄泉の川でも渡るがい！！！！」

侍さんの刀が振りかざされる。女の人が庇うように、男の子をその身に埋めた。

金属音が、響く。

「なっ…？」

鞘と刃先がぶつかって、ギチギチと音を立てる。

「侍さん！あんたねえ、ガキンチヨの出過ぎた言葉の一つや二つで青筋立ててんじゃないよ！大人げないって思わないわけ！？」

間に滑り込むようにして、ぎりぎり相手の剣戟を受け止める。流石に刀を抜く暇はなかったけれど、大丈夫。男の子の顔も女の人の背中も、真っ二つにはなっていない。

恐る恐るという感じできこちなく振り返った女の人の目を見て、ニイツと笑う。

あれ。

私今、めちゃくちやかっこいい？

「うおりゃあつー!!」

相手を刀ごと押し返す。

「うおおお!?!」

そこまで力を入れてないのに、やけに大げさな声をあげて待さんが倒れた。

てか、言っちゃ悪いがかっこ悪い。

「ば、馬鹿な!こいつが力押しで負けるとは…!貴様本当に女子か!?!」

「失礼な!そりゃモンローには負けるけどそれなりに胸はあるわボケ!?!」

「も、もんろう?食い物か?」

いや人名だけど。

そっか、タイムスリップにせよトリップにせよ通じないか。

「どうでも良いわ!!小娘、我らに盾突いてただで済むと思うな!」

「いやそんなことした気は毛頭ないんですけど!うわああああ皆々様落ち着いてくださいってえ!」

いつの間にか、全員が全員刀抜いてるし。こう改めてみると結構な数だよ、どうしょ。

「死ねえ!!」

「…くっ!」

刀が振り下ろされた。侍さんたちの見開かれた瞳に、引きつった表情の自分が映る。

やべ。ここがどこかも分かんないうちにホトケになるのか、私。

「うおおおおおおおおおおおおあああああああああ……!!」

「!?!」

「ぐあああああ!!」

雄叫びと共に目の前に広がるのは、赤。

血潮じゃない。それよりも鮮やかな、火炎の色。

ワイヤーアクションも顔負けなぶつとび方で、ほとんどの侍が視界の届かない所まで飛んでいった。

「貴殿ら!!この甲斐の地で何をしておるのかわかっておられるのか!!」

すぐ横で叫ばれる、怒気を帯びた声。その聞き覚えのある声に、首を振じって声の主を見上げる。

…あ、と。

小さく声が漏れた。

「不躰ぶしつけにもお館様の統べるこの国を闊歩かっほしただけでは飽き足らず、民草を傷つけそれを止めに入って下された女子までも殺めんとするとは—！」

全身に纏う紅よりも、赤く燃え盛っている。

激情に突き動かされるその姿は紛れもなく、虎。

「この真田源次郎幸村、断じて許すことは出来ぬ—！よってこの国を汚した業、その身を以て償われよ—！」

其の貳 燃ゆるミタマ (後書き)

颯爽(?)と幸村登場!

其の参 旅人のナ（前書き）

ギャグです。

オリキャラが幸村より煩いという。どんなだ。

其の参 旅人のナ

「そっぴや君さあ、なーんであんなヤバげな侍さんに喧嘩売ったのさ？」

所変わって、どっかの団子屋。みたらしを頬張りながら、隣の男の子に聞いてみた。

「だってあいつら大声で言うんだもん！『甲斐なぞ俺たちの手にかかれば一捻りだ』って！」

「ぬあにいいいいいい！？彼奴らあやつそのようなことを！？」

「ちょ、真田さん。唾散ってます」

あと鼓膜が痛いです。

当人はハツとして「失礼致した！！」とこれまた大声。リアルに聞くとすんごい音量だなあ。

「それと、某のことは幸村で結構でござる。敬語も抜いて下さって構わぬ」

「え。いいの？」

と言いながらも、早速抜けてたりする。

しかし、人生ってわからないもんだ。

だって、隣に幸村が座ってたんだよ？それもバサラの幸村が。液晶の内側にいたこいつが、目の前で団子に食らいついてるなんて今だに信じられない。

「…それで俺があいつらに怒鳴ったら、一番近くにいた奴が刀を鞘に入れたまま殴りかかってきて」

「なるほど。そこを庇ってお母さんがやられちゃったのか」

「…は？」

何かぼかんとした顔で見られるけど、私何かおかしなこと言ったかな。

「私は教師です」

後ろからかけられた声に振り向くと、さっきの女の人が、皿にのつた団子を手に立っていた。

「この子は教え子なんです。丁度書道用の墨が切れていたのので買いに出たら、たまたまこの子に会って。そこをまあ…」

苦笑しながら、お皿を手渡してくれた。

何でもお礼だからって、団子屋の台所を借りてまで作ってくれている。作ってるところを見なかったら疑っちゃう位の腕前だ。

「どうぞ、幸村殿」

「か、かたじけない」

そしてなんだ、幸村の皿に盛られている団子の量は。女の人の手めっちゃプルプルしてるんだけど。

たぶん幸村ならこれ位の量は食うだろうと予想してこの量なんだろうけど、まだ足りんと思うのは私だけだろうか。

「そつえば聞きそびれ申した。貴殿の名は、なんと…？」

真っ直ぐ私を貫く幸村の瞳。とても真剣な顔だけど、両手に持っている団子のせいでなんだか笑いそうになる。

「ええっと…。紫苑^{シオン}、っていうんだ」

……。

ん？言った端から何か違和感。

「紫苑殿、…でございまするか！！」

「花の名ですね。きれいな御名前」

え。ちよっと待って。反射的に答えちゃったけど、これ…。

「二 動のハンドルネームじゃねえかああああああ俺の馬鹿ああああああ！……！」

「し、紫苑殿！？」

ぬおおおおお！！後悔先に立たずとはこのことかああああ
！！

「お姉ちゃん！髪の毛にみたらしついちやったよ！」

「え！？ちよつと僕冗談はよしてってああああほんただああああ
ああ！！ベツトリ！異様にたれがベツトリだああああ！！！」

髪を振り乱して嘆いていたのが凶と出ちまったあ！！くそおおお
おお！髪の毛なんて伸ばすんじゃなかったああああ！！

「紫苑殿落ち着かれよ！主人！何か拭うものはがざらぬか！！！」

「お姉ちゃん！危ないから髪の毛ぶん回すのはやめて！」

「あら？幸村殿はお団子、もう平らげてしまわれたんですか。また
作りますので待っていて下さいね」

「先生！？今必要なのはおかわりの団子じゃなくて濡れ布巾だよ！
？」

「むああああ！！ぬああああああああ！！！」

しばらくお待ちください。

「ごめんなさい…」

もう、穴があれば入りたい。

「いえ、一向に構いません」

そう言って笑ってくれる幸村。うう、幸村に落ち着けて言われる私ってなんだ…。

「イカか…。イカの種類か…」

「イカ!？」

ふぐつ、男の子にまでビビられてるよ…。

「まあ、それは何より。幸村殿、紫苑さん」

「はい？」

スツとお辞儀するその姿が、素直にきれいだなと思った。

「遅ればせながら、お礼を言わせてもらいます。危ない所を助けていただき、本当に有難うございました。言葉では言い尽くせないほど、感謝しております」

「うん！幸村様、お姉ちゃん、ありがとう！」

「え、えへへ…」

な、何か照れる。

「いや、某は武田の武士^{モリノブ}として当然の事をしたまで。礼には及びませぬ。

それよりも、某も貴殿に礼を言いたい」

「え?…あ、わ」

今度は食べかけの団子も皿に置いて、深々と頭を下げられる。

「紫苑殿。此度の件、心から御礼申し上げます!!」

「おおあああ!ちょ、ちょっと!そんな頭下げないで!!」

大の男、それも武田の将に頭を下げられると少し気まずい。慌てて顔を上げさせようとして肩を掴むけど、

(なぬう!?!びくともせん!!)

幸村。どこにどう力を入れたらそうなるんだ。

腹か、その逞しい板チョコの辺りか。

「二人とも何してるの…」

ほら見ろ!!また男の子に変な目で見られたじゃないか!

「…紫苑さんって、旅の御方ですか?」

「え?」

「いえ、ここらでお会いしたことはありませんし…」

幸村との格闘(?)の最中、女の人が首をかしげる。

おお、その設定はいいかも。先生、そのネタいただきます。

「そ、そうなんです!でも、まだ旅に出て日が浅いのでイロハはさっぱりで!あ、できればどっか泊るところがあれば嬉しいんですけど

「!」

「それは真でござるか紫苑殿!!」

「うおおおお!!」

いきなり顔をあげたので、反動で倒れそうになった。

「しからば、我ら武田の館で寝泊まりしてはどうでござろうか!!
衣、食、住、足りぬものはありませぬ!! お館様も客人を歓迎し
てくださると思いますゆえ!!」

気のせいだろうか。幸村の顔が赤い気がする。

「い、いやいやいや。それは流石に遠慮します」

「そーそー。あんな暑っ 苦しい所に女の子連れてくのは酷だと思っ
ぜ?旦那」

「!..!」

「!..!」

「子安!?!」

「猿飛だ」

はっ。ついうっかり。

「姉さん、俺様を誰と間違ったのさ？」

言えない。中の人だとは。

「おお佐助！」

「旦那、お館様が早く来いってさ。たぶん次の戦についての話だと思っただけど」

「む、それは急ぎ戻らねば！…しかし、紫苑殿はいかがされるのか？」

それなんだよなあ……。確かに佐助の言う通り、あそこに行くともものすごい事になりそうだし。

何と言えはいいかわからないけど、とにかくこう、ものすごい事に。

「あの。もしお困りのようでしたら、どうぞ私の家に来て下さいな」

「え！いいんですか？」

「はい。あ、申し遅れました。私の名は、…佐保サホといいます」

これは…ッ！なんとありがたい…！！

「よっしゃああああ！寝床ゲット！！」

「げつと？食い物でござるか？」

「イカ？イカの種類？」

誰かが何か言ってるけど気にしない！

其の参 旅人のナ（後書き）

今回こんなですが、次はシリアス展開だと思えます。
しかしもうちょい佐助を書きたかった・・・！
オリキャラあと一人二人くらいは出るかな。

其の四 行き場なきナミダ（前書き）

しい、現実を知るの巻き。

前回とはテンション全然違います（特に後半）。ご注意ください！

其の四 行き場なきナミダ

幸村や佐助と別れて、男の子を家まで送った後。私は佐保さんと並んで歩きながら、彼女の家まで案内してもらった。

歩いている間に自宅で寺子屋を開いていると聞いて、大きい家なのかと思っただらその通りだった。豪華な造りの家じゃなくて、普通の家を一回り大きくさせただけみたいに見える。

しかしこんな大きな家、一人で切り盛りするのは大変じゃないんだらうか。

「それでは、紫苑さんはこの部屋をどうぞ。少し広いですけどいいでしょうか？」

「あ、はい。ありがとうございます！」

荷物（って言っても刀しかないけど）を下して胡坐こゝろをかく。おお、畳のええ匂いがする。

「布団一式は押し入れにあります。何か足りないものがあつたら言つて下さいね」

「あ！えっと、足りないもの、じゃあないんですけど…」

「はい？」

「敬語、抜いてもらつていいですか？どう見ても私の方が年下ですし、もっとこう、楽に話してもらつた方がこつちとしても…」

ものすっごい大人びているから気付かなかつたけれど、目測で言えば佐保さんと私の歳の差ってせいぜい2、3歳くらい。そこまで離れてはないはず。

これも何かの縁だし、もっとフレンドリィに接してもらいたい。

「…うん！わかった。それじゃあ短い間かもしれないけれどよろし

くね、しいちゃん」

「はい！」

…うん？しいちゃん？

「紫苑ちゃんじゃ長いから、しいちゃん。いい？こっつ呼んで」

「…はい！もちろん！」

佐保さんは柔らかく笑って、夕餉の時間には呼ぶねと言って出て行った。ほんと優しい人だなあ。

しかし、ユウゲって何だ？

「……」

さて、これからどうするか。

泊めてもらうとはいえ人様の家。ちよろちよろ中を歩くのは無作法だろう。外を歩くのもいいけど、また土地勘がない人間がそんな事をすればどうなるかは目に見えている。

となると、選択肢は一つしかない。

「寝るぞおおおおおお！！！」

布団を敷くのも面倒で、そのまま畳にダイブ！！

ドス。

「あがああああー!!」

したら、懐に入っていた何かの角っこがモロに胸に突き刺さった。しばしの間、のたうち回る。

「もう何!?!」

手をつ突っ込んで、しばらくゴソゴソとまさぐる。…これ、傍から見れば胸掻いてるように見えるな。危ねえ。

呑気なことを考えていたら、手に何かひんやりした冷たさが伝わる。

こいつか!と思い引っ張り出してみても、…息が詰まった。

ぐるぐるとイヤホンを巻きつけてある、シルバーの機械。

…アイポッド。

私のアイポッドだった。

「…嘘」

こつちの世界に来た時、現代のものなんて一切身につけてなかったのに。

絡まりそうになるイヤホンを解いてボタンを押すと、真っ黒だった画面に光が灯る。…間違いなく、私のものだった。

アイフォーンだタッチパネルだと世の中では騒がれてるけど、私

のは未だにナノで、カメラ機能さえ付いていない。だからパソコンから落とさないと、写真なんて見れない。

それが面倒で、これに入ってる写真は、母さんにしつこく言われて渋々入れた1枚だけ。

今まで一度も見ようとさえ思わなかったのに、選ぼうとしているのはアニソンでも、ユーチューブから落とした動画でもない。

画面に家族が映った瞬間、ぼろりと雫が零れ落ちた。

視界がどうしようもなく滲むけれど。父さん、母さん、兄さんの姿だけは霞みもしない。なのに、溢れる涙は増していく。

今更、本当に今更。

私は元の世界への帰り方もわからないのに、この世界にいるのだと痛感する。

そしてこんなに泣いても何のアクションも起こらない事から、漫画みたいに楽に帰ることなんてできないんだと理解する。

最初ここで目覚めたときと同じように、この世界は夢だと思おうとした。

でも、できない。

侍さんの刀を受け止めたときの手ごたえや、幸村の炎の色。

口に詰め込んだ団子の味や、佐助の呆れた声が夢だなんて、思えない。

現実なんだ。どうしようもなく。

佐保さんに聞かれると思ったけど、耐える事が出来ずに、子供み
たいに声を上げて泣いた。

泣き疲れてぼんやりしたまま空を見ると、日はとつくに落ちてい
た。瞬く星が見える。

そっか。こんなに違う世界だけど、どこの世界でも遠くの星には
関係ないよね。

また泣きそうになった。涙腺緩いのかなあ、私。目を乱暴に擦っ
て耐える。

ここまで泣いても何も起こらなかったんだ。これ以上泣いたって
意味はない。

どうやったら帰れるかなんて全くわからないけど、こつちに来る事が出来たんだから帰る方法だってきつとあるはず。とにかく今日は寝よう。起きたら佐保さんにユウゲの事を謝って、それから帰るためのヒントを探そう。

のろのろと身体を起こして、押し入れから布団を引っ張り出す。

着替えるのも億劫おっくうで、そのまま潜り込んだ。

そっだ。寝る前に一曲聞いちゃおうか。

湿った気分を切り替える為にネタ曲を選んで、イヤホンをつけた。

『……………』

あれ。音量小さかったかな。

『……………どっ？そっちの世界は』

身体が硬直する。

聞いた事のない女の人の声だった。
妖艶な。それでいて、畏ろ^{オッ}しい声。
その人は深く嗤いながら、続けた。

『楽しんでるかしら?』

其の四 行き場なきナミダ(後書き)

さあ急展開!

其の伍 願いのダイショウ

「…あ、」

『ん？』

「貴女、…誰ですか」

詰まりそうになりながら、それでも尋ねる。マイクなんてついてないけど、相手にも私の声は届いているようだった。

『店主よ。願いを叶える店の、店主』

は？と言いついそうになるのを、ぎりぎり我慢する。

『別の言い方に置き換えれば、アナタの知り合いの知り合いよ』

さっぱりわからない。それはつまり、

「私と貴女は他人ってことじゃないですか」

『そんなことはないわ』

きつぱりと。どこかから語りかけてくるこの人は、言い切った。

『だって現に、あたしとアナタは話しているでしょう？』

その時点でもう、関わりができてしまった。あたしとアナタの縁は、繋がったのよ。わかる？』

言いたい事は分かる。だけど脳がもう活動を止めていて、言葉だけが中でぐるぐる回っている感じがする。

『まあこんな話しても、アナタの為にはなってもあたしの為にはならないから、そろそろ本題に入るわね』

『帰りたい？こっちに』

心臓が高く跳ねた。

「帰りたい！！帰りたいです！！店主さんでしたか！？貴女にはそれができるんですか！？？してくれるんですか！？？」

『落ち着きなさい』

低く下がった声に、昂った感情が一気に沈められる。

『まずは、アナタがアナタの置かれている状態を知ることよ。

アナタのいるその世界だけれど、あるゲーム、もとにあるアニメの世界だということはわかるわよね？』

「わかつてます！！！」

『話を最後まで聞きなさい。』

その世界は正確に言えば後者。もっと言えば、その物語が始まる少し前の世界よ』

途中で声色が明るくなった。…この人、絶対おもしろがってる。人の気持ちも知らないで。

ただどこで怒鳴ってはいけないから、堪える。

『でもね、アナタのいるその世界は、本来の道筋から大きくずれている。』

…アナタ、この物語の結末は知ってる？』

「……そりゃあ……」

私はアニメ好きの動画好きだけどゲーマーではない。せいぜい兄さんのするゲームを横から見たり、プレイ動画を鑑賞する位だ。

だからゲームの方のバサラは詳しくないけれど、アニメの中の彼らがどんな道を辿ったのかはわかる。

もちろん、おしまいも。

『アナタのいる世界には、その結末は存在しない』

「…え？」

『代わりにどんな最後になるのかはあたしでも知らないけれど。とにかくそれだけは言えるわ』

「な、なんで。どうして」

『アナタがその世界に来たからよ』

当たり前、というように、サラリと答えられた。

『ヒトが一人世界に入り込むだけで、どれだけ世界が揺れるか。』

しかもそれが、もう終わってしまった物語の世界に』

「……う」

それだって私の意思じゃない。…でもそれは言い訳でしかないとだって、分かってる。

やってしまったことにあれこれ言葉を添えたって、事実が変わらないのだから。

とにかく。

本来の道を、歩まない世界。

私はそこにいるんだ。

『そこで、話は初めに戻る。言ったわよね？あたしは、願いを叶える店の店主だと。』

アナタのその願い、叶える事は出来るわ。

ただし、対価がある』

「たい、…か？」

『何かを得るために差し出さなければならぬモノよ』

それをお代として、あたしはこのミセを営んでいる。
店主さんはそう言った。

『アナタの願い。その世界からこちらの世界へと帰りたいというアナタの願い。』

それを叶えたいというのなら、…正しなさい』

「…正す？」

再度、店主さんの言葉を復唱する。口に出して言えば、少しは実感がわくだろうと思ったけど。こんな時は自分の言葉でさえも薄っぺらい。

『正しい結末に、その世界の人たちが行き着くように。アナタが彼ら、彼女らを導きなさい。』

それまでの道行きが、本来の話からどれだけでも構わないわ。アナタがその世界にいる以上、寸分違わず同じ話なんて、できるわけがないのだから。』

…ただ。オシマイだけは、違える事のないように』

「……………」

『それが完遂された時には』

アナタの願い、かなえましょう。

『誤解しないでほしいんだけど、あたしがアナタをその世界に落とすたわけではないわよ。ヒトを他の世界に送るなんてこと、そんなことをあたしが対価もなしにするわけがないんだから』

笑いながら、そんな大層な事を聞かされた。∴裏を返せば、対価さえ渡せばそれも可能だということ？

アイポッドを通じて話しかけてきたことといい、このどうしようもない状態を打破する方法を教えてくれたことといい。

この人、一体何者なのか。

「…あの」

『なあに？』

「貴女は私の事を、どこで知ったんですか？」

少なくとも私は、何もしていないわけだし。この人はどうやって私の事を知ったんだろう。

店主さんは小さく、可笑しそうに笑った。

『あら、鈍いわねえ。わからなかったの？さっき言った、アナタの知り合いからよ』

「…あ」

確かに言っていた。

とはいえ、知り合いっていても沢山いすぎて見当がつかない。

だから今は、そうやって私の事を気にかけて、この人へ伝えてくれた人に感謝するしかできない。

帰ったら、面と向かってお礼を言おう。

そう、帰ったら。

『じゃあ、今この時伝えるべき事は全て伝えたから、あたしはこれで失礼するわ』

「えッ!?ま、待って下さい!!」

自分の世界との繋がりを、こんなにあっさり手放したくない!!

『心配しなくても、アナタがまたあたしを必要としたなら。その媒体を通してまた、話ができるはずよ』

ホントウに、必要としたならね。

『この世に偶然はないわ。あるのは、必然だけ。』

アナタがあたしと話せたことも、もちろんその世界に落ちたことも。全てが必然』

それを忘れちゃだめよ？

ブツツと、何かが切れた音が、現実を呼び戻す。

間を置かずに続いたのは、私が選んだ曲の場違いに明るいメロディーだった。

其の伍 願いのダイショウ（後書き）

ハイパー侑子さんタイム。てか、あの人はバサラ知ってるんでしようか。

知ってたら知ってたで恐ろしい…！

この話の中で侑子さんのポジションは、ツバサにおける彼女のそれとよく似てるものになると思います。そして、これから当然彼女の出番はないかと…（汗）。

とりあえず、しい頑張れ超頑張れ。

其の六 一人と独り（前書き）

春休み効果で今は投稿スピード早いですが、学校始まったら亀になるんだろうなーと思う今日この頃。どんなに遅くなっても続けるつもりなので見ていただけると嬉しいです・・・！
今回もしんみりです。

其の六 一人と独り

謎の店主さんとの会話が終わり、選んだ曲の再生が終わった後も、しばらく動く事が出来なかった。

頭に店主さんの言った言葉が、矢になって突き刺さっている。

その結末は存在しない

アナタが彼ら、彼女らを導きなさい

オシマイだけは、違えることのないように

吐きそうだ。

そんなに大きな対価、私にちゃんと払うことができるのだろうか。
たった一人で？

「…しいちゃん？」

「ッ！わああああ！！」

「あっ！ごめんね！びっくりしたよね」

寝巻き姿の佐保さんがふすまを開けて、心配そうにこちらを見ていた。間一髪、アイポッドは布団の中に突っ込む。

「水を飲みに起きてきたんだけど、まだ寝てないみたいだから心配になって」

「…あ。そう、でしたか…。すみません」

「いいの。気にしないで？」

そう言っつて、私のすぐ横に座ってくれた。…そこまで気を遣わせていたなんて、情けないや。でも、さっきの会話は聞こえてないみたいでよかった。

「やっぱり、異国の地は怖い？」

「だけどね、甲斐はいい所よ。国を治めている人は虎だけど、民を深く愛して下さっているから」

…そういや、自分は旅人だっつて言っていたんだっけ。そっか、それでこんな言葉をかけてくれているんだ。

「…一人は、怖い？」

柔らかい言葉なのに、鋭く心の隙間を突かれた気がした。

「恐いよね。だから、さつきあんなに泣いていたんだよね」

そつと、佐保さんが手を握ってくれる。…あつたかかった。

それだけで、また涙が散ってしまう。

「でも、そんな時こそ独りになっちゃ駄目。

…世界は厳しいかもしれないけれど、人はみんなあたたかいよ」

ハツとして顔を上げる。佐保さんの笑顔が、月の光に照らされて白く輝いて見えた。

「だから、人と人の繋がりだけは厭わないで。ね？」

「……はい」

「うん！それじゃ、今日はもう寝よう。ゆっくり休んで、また明日を始めようよ」

最後にギュッと手を握ってくれて、そのまま佐保さんは部屋を出て行った。

「…うん、そうだ。弱気になっちゃダメ！引きこもっちゃダメ、と！」

ぺしぺしと頬を叩いて、ぐじぐじした感情を叩きだす。そうだよ、折角バサラの世界にいるんだ。ここで私がスタイリッシュにならなくってどうする！

でもスタイリッシュになるってどんなだ？

「ビ、ビーム？目からビームとか？」

その前に城より巨大化した方がいいんだろうか。

でもそうになったら武将と戦う前に、ウルト マンに退治されそうな気がする。

「ダー！！もういいもういい！とりあえずもう早く寝る！」

考えるのも面倒になって、うつ伏せに布団にダイブ！！

ドス。(二度目)

「うがあああああ！！また！？またですかあああああ！！」

したら、全く同じ部位に同じ物が突き刺さった。飛び込むのってよくないよね。反省反省。

其の六 一人と独り（後書き）

今さらですが、

原作キャラのキャラ崩壊あり。

バサラの爽快感はあんまりない。

です。すみません、風の力量不足です。

この回だけでは面白味に欠けるので、今日中にもう一話投稿します。
テーマは愛。そう、愛です。

其の七 赤虎のシテイ（前書き）

最初っから最後まで武田です。真っ赤です。後半すごいです（色んな意味で）。

其の七 赤虎のシテイ

闇夜。

月と散り散りに光る星が、人の世を朧に照らし出す頃。

一塊の影が、正面の人物に跪いた。

「猿飛佐助、ここに」

「御苦労」

答えたのは、雄雄しい立ち居振る舞いの兵。ツワモノ

一対の角を思わせる突起を備えた紅の兜。

両肘、膝に風林火山の文字を刻む、ここ甲斐の大將にして虎

武田信玄、その人である。

「して、此度我が領内に現れた不届き者は」

「はい。大將の思ってた通り、少し前に尾張の魔王さんとの戦でやられた武將の下っ端の下っ端だったよう。ここに来たのも何とか食い繋ぐ為だったんでしょー。少なくとも、近隣国から来た斥候ではないと思いますかね」

もしそうなら、昼日中に大声でここを罵りながら歩くななんてしないでろーし。

そう言いかけたが、く、と飲み込む。穏やかにあるようで、しかし確かに張り詰めているこの空間で、軽口を叩くのは無粋だろう。

「他のところでも、魔王さんとの戦で敗れた兵士がうろろしてるみたいですねえ。そういう奴らはもう戦意喪失してるみたいで、ついでに武士としての誇りも忘れたのか、西で東で賊になってますよ」
「志なき刃は狂犬けふけんの牙に同じ。…とな」

誰に言つてもなく、重々しく呷く。
深く、噛み締めるように。

「第六天魔王、織田信長。…いずれ対峙せねばならん相手よのお」

だがしかし。甲斐のみで対するには余りにも大きく、余りにも禍々しく。

相手取るには、…分が悪い。

信玄ともあろう者が弱腰になっている、というわけでは断じてない。ただ冷静に事を見極め決を出しただけであり、自軍の力では織田とやりあった後上洛するのは至難だと認めることは、歴戦の将であればある程し難いもの。

それを成し得ることができるのは、紛れもなく名称の証といえよう。

…ただ。名将では、魔王を倒せない。

「天下取りよりも、宿敵と雌雄を決する事よりも。まずそれが、碎かねばならぬ壁ぞ、佐助」

「ええ。俺もそう思、」

「お館様あああああああああ！……！」

けたたましい音を立てて、障子　信玄公に向かって真向かい、
佐助に向かって真後ろ　が消し飛ぶ。
現れたのは、例によって真田幸村である。

「真田源次郎幸村、只今馳せ参じ申した！！用件とはいかなる物で
ございましょう……！」

「……旦那。これでブツ飛ばしたの何回目だと思ってるの？」
無論、百二百ではない。

「うむ、幸村よ。今日の昼時、おぬしは賊に屠られかけておったわ
が民を救ったそうじゃな？」

「いえ！！それは僅かながら違います、お館様！！某より早く駆
けつけ、民と賊の間に割って入って下さったのは、ここ甲斐を訪れ
ておりました旅の御方であります……！」

「ほう。その旅人とは？」

信玄に尋ねられ、一瞬戸惑いの表情を浮かべる幸村だったが、す
ぐにそれは明るいものへと変わる。

「はい！！女子ながら勇猛果敢に賊に立ち向かう様、実に見事で！

！抜刀されなかったのも、己の腕に自信があったからでございませう！もし某が駆けつけていなくとも、紫苑殿ならあの程度の輩なぞ御一人で、」

「馬鹿者があああああああああああ！！！！」
「ぐはあああああああああああ！！！！」

信玄の鉄拳が幸村の顔面を捉え、上空へと打ち上げた。天井が爆音を立てて危なっかしく軋み、人型の窪みができる。

「幸村よ！！通りすがりの旅人に後れをとるとは何という有様じゃ！！武田の武士であるのならば、自国の民の危機あれば風の如く速く！！いいいや風より速く参じぬかあああああ！！！！」

重力に従い落下してきた幸村を大喝する信玄。
理不尽である。

「も、申し訳ありませんお館様！！この幸村そこまで至らず、誠に面目のうございます！！」

幸村も主君の暴力を気にするでもなく、落ちたその場所で姿勢を正し詫びる。

「そして幸村よ。おぬしはこの後始末を如何するつもりなのか」

「？ 後始末、とは一体、」

「ぬうあああああああああああ！……！」
「あがあああああああああ！……！」

今度は横殴りに打ち抜かれ、庭まで回転しながら飛んで行った。
巻き起こる煙の中、佐助がやれやれと頬を掻く。

「その女子に先んじられた事への後始末よ！！聞けば女子は帯刀しており一人旅のようじゃのお！？余程腕の立つ者でなくては、この乱世の世を渡り歩くなどという愚の極みを犯すわけがなかるう！！幸村よ、その女子と一戦交えてくるのじゃ……！！」
「なっ、何と！？」

この一言には流石に思う所があったのか、土にずっぽりはまった頭を引き抜き、驚きの声を上げる。

「し、しかしながらお館様！！恩ある御方にそのようなことをするのは、」

ダン、と地面を蹴る。

「あまりにも失礼ではございませぬかあああああ……！！」
「ぬうううううううううう……！！」

一瞬で相手の懐に潜り、顎を下から突き上げるようにして強打し

た。

「なればこそよおおおおお！！！」
「のおおおおおお！！！」

だがその一撃でやられる信玄であるわけがなく、自らを打った家臣の腕をむんずと掴み、空中で大きく一回転させた後地面へと叩きつける。

人型の窪み、第二号。

「何も本当に殺り合えとは言っておらん！！どのような形であれ己を上回った相手と刃を交え、その強さを己のものとする！！そこに男子おのこも女子もない！！ただ鎬しのを削る武人がおるだけよ！！」

まるで仁王のように足を踏ん張り、幸村を見降ろす信玄。
無茶苦茶である。

「お、……お館ッ、様……！！」

しかし、幸村は感極まったように言葉をふるふると震わせる。「旦那ー、大将ー。今のはおかしいでしょー。もしもーし？」と微妙に諷める佐助の声など届きもしない。

完全に、二人の世界である。

「承知！！心得ましたお館様！！この幸村、必ずや紫苑殿を打ち負かしてみせましようぞー！！」

「うむ。その心意気やよし……」

「お館様……」

「幸村……」

「お館様……」

「幸村……」

「おやかたさばあああああ……」

「ゆきむるあああああ……」

「……やれやれ」

熱く、暑く、拳を打ち合う二人を呆れた様子で見守る佐助。

…彼は、気付かない。

武田屋敷の屋根の上。

信玄と幸村を、静かに傍観する紅い瞳に。

其の七 赤虎のシテイ（後書き）

書いといて何ですが、お館様の言ってることが支離滅裂すぎる!!
あと皆さん、あんだけのモーションしかしてないしいになぜそこ
までの高評価を・・・。

殴り愛ですよ、やっと出せました！楽しかったです！

其の八 開始のキザシ(前書き)

しいの子育て奮闘記(笑)。

……違います嘘ですごめんなさい。

其の八 開始のキザシ

「しいちゃーん、おなかへったあー」

「次から家で食ってこい！！次！」

「かわやにだれかはいつてるよおー。もれちゃうよー」

「アンタ男なんだから外でしろ！！次！」

「弁之助くんがないてるー」

「あやせ！！次！」

「もれたあー。しいちゃーん！」

「垂れ流しながらこつち来んなー！！！」

信じられん。

なんで私はバサラの世界にいるはずなのにガキンチョの世話をしてるんだろつ。

いや、わかってるんだけどね。自分が撒いた種だつて。

朝ごはんの時間に、寺子屋の話をしてしまったのがいけなかったんだ。

なんか寺子屋って言っても、保育所と学校を合わせたようなものらしくて、勉強できる歳の子とまだまだ遊びたい盛りの子とに別れてるらしい。いつもは近所の人たちがヘルプに来てくれるらしいんだけど、今日に限って誰も手が空いてないそうで、「助手も一人いるんだけど、その人も出かけてるんだ」とのこと。

で、もちろんだけど私が勉強を教えられるはずがないので、ちっこい子は任せて…と言ってしまい、こつやってガキンチョ共のお守りをする事になったのだった。

今の内に慣れておかないと。

(…でも、何か引つかかる)

初めて刀を 用途はともかく 使った時。

なんだかとても、しっくりした感じがした。

あんな下手したら死ぬかもしれない状態で妙に落ち着いていたし、私より刀を使い込んでるはずの、侍さんの一撃を受け止めたときも力負けしてなかった。

何より、私に瞬時に人との間に滑り込み攻撃を防ぐなんて芸当、出来るはずがない。体育の体力測定、いつも平均以下だったし。

まさか、…とは思っけど。

ここに来る時、身体能力とかアップしたんだろうか。
もしそうなら。

「……しいーちゃん!」「」

「あーもー!!!人が考え事してる時に何用じゃー!!!」

武将達と渡り合うことが、できるのかな。私でも。

「失礼！！紫苑殿、紫苑殿はおられるか！！」
「あれえ、幸村？」

馬の嘶きが聞こえたから何だと思つたら、ご存じ幸村が険しい顔をして戸口で待っていた。何故か一緒に彼の忍さんもいたけど。

「サスケエ…、じゃなくて佐助も？何かあつたの？」

「なあ、それ言い直した意味あんの？」

「バカヤロウ、同じようで大違いなんだぞ」

「はあ…。まあとにかく。悪いねえお昼時に」

全くだ。やっと生徒追い出してゆつくりできると思つたのに。しかも今から昼飯食うぞーって時に。

幸村の表情が硬いからヤバい事でもあつたのかな。…しかしなんだろう。ものすごく嫌な予感がする。

「いや、もう少し時間ずらした方がいいってことはわかつてるんだけどさー、こっちもこっちで忙しくて時間取れなかつたわけよ」

「そろそろ軍神と一戦あるんだし」
ちんくちん

「ッ!」

軍神と、一戦。

ということは、川中島の戦い?

…いよいよ始まるということなんだ。

どうしよう。やっぱり怖い。

「…姉さん?どーしたの、そんな顔色変えて」

「え」

顔を覗きこまれる。ヤベえヤベえ!表情に出てたか!!

「いつ、いやあ別にい!?!また戦があるんだなって思ってた!」

ああああ声裏返ってるよ…。絶対他の事考えてたつてバレてるよ
馬鹿あああ…!!もつとまともな嘘をつけえええええ…!

「つて、てか、そんな戦の前に幸村も佐助も何の用!?!うわ、まさ
か許可なしにここに甲斐入ったら罰があるとか何とか!?!」

「いやいや。あんたがもし賊だったらそうだろうけど、ただの旅人
さんに俺達がどうこう言う気はないよ。そうじゃなくてさあ…!」

「紫苑殿!」

幸村が馬から降り　　ちょっと待て、何でそれだけで地面がへこむ　　ながら叫ぶ。

「は、はいいい！」

「某と一度、お手合わせ願いたい！」

「何でしょうか、……つてええええええ！？なにゆえに！？」

初戦相手が幸村！？キツすぎる！！どうせなら足軽さんとか小早川とか小早川とか小早川とかがよかった！！舌噛む！！

「それは……！！某は紫苑殿を越えねば、武田の武士としてお館様に……ッ！！」

ちょっと待てい。お館様、貴方幸村に何言っただ。

助けを求めて佐助を見たら、顔の前で手を合わせてごめんなさいのポーズ。おどれこの猿……！

……しかしこれ、断れそうな感じじゃないなあ。

……。

「いいよ。じゃ、刀取ってくるから待っというて」

「おお！！かたじけない！！」

「いやほんと、すまんねー姉さん」

「ううん。……やっぱり、始まる前に腹くくっとかないとだめだね」

「？」

佐助は分からないというように眉をひそめたけれど、それ以上は何も言わずに背を向ける。

うん、そうだよ。怖がってちゃ始まらないんだ。

其の八 開始のキザシ（後書き）

次回、激突！！

…ってほどカッコよくはないと思います。ほぼ戦闘シーンの予定ですが、おそらく残念クオリティかと。 ほぼ戦闘シーンの予

其の九 爆ぜるトウコン(前書き)

深夜に書いた+変なハイテンション!! 秀困気バトル
今回ものすごく雑です。色々残念ですが、どうぞ!

其の九 爆ぜるトウコン

…すごい。

ビリビリと張り詰めている空気が、痛い。

「二人共、ちゃんと構えたー？んじゃ、俺様が合図したら開始ってことでいいね？」

「…無論、構わぬ」

「…同じく」

向かい合って、お互いそこそこ間合いを取ってるっていうのに。全身に幸村の気迫を感じる。

でも前の侍さんの時みたいに、怖くない。

それどころか、わくわくしてる自分がある。幸村と戦える事に、喜びを感じている自分がある。

だってさ。

侍さんから感じたのは殺気だったけど。

幸村から感じるのは、覇気。

殺す者と殺される者との間で感じるものじゃなく、戦う者、鎧を削りあう者同士の間で発するもの！！

「しいちゃん…」

うわあ。いつの間に私、バサラ色に染まってたんだろ。

でも、…悪くない！！

「……ッ！始め！！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおお……！」
「はああああああああああああああああああ……！」

槍と刃が、ぶつかり合った。

「ぐ、…おおおお…!!」

幸村の顔面を狙った一撃。それは彼の二槍に阻まれる。だけど刀の切っ先は、彼の鼻先ギリギリまで届いていた。

「ねえ幸村！槍使いが速攻で間合いに入られちゃカタナシね!!」

思わず口の端を吊り上げる。あれ。この言葉って誰かのセリフじゃなかったっけ？

まあいいか！

「何ッ!!」

大地を蹴って、幸村を飛び越し背後に回った。ガラ空きの横腹に刀を振るう！

「く…ッ！」

だけど手に伝わったのは、鋼と鋼がぶつかる感触。やっぱり幸村だ。防いできた。

「おらああああああああ!!」

幸村の槍先から炎が燃える。ああもうアニメ見てる時はどうなったんだと思ってたけど今はカケラも気にならない!!

後ずさって避ける。見れば、一瞬前私のいた所にでっかい穴が出来ていた。

あつぶねえ…、なんて思ってる場合じゃない。

この距離は幸村の攻撃範囲!!

「うおおおおおおおおおおお！！」

槍を地面から並行に振る。それだけで紅の烈火が衝撃波と共に襲ってくる。

速い。…だけどちゃんと見える！！

「はあッ！！」

縦一閃に裂く。パツクリと二つに割れ、両脇を通り過ぎていった。

「どうだ！！」

「まだまだア！！！！」

幸村の吠え声と共に、火炎は後から後からやってくる。次々と切り裂く度に、通過する炎の熱を感じる。熱いけど、今はそれが心地いい！！

「上等！！あなたの火、全部叩き切ってあげるよ！！」

「あう…。しいちゃん、大丈夫かな…」

一方佐保はというと、怖いがやはり紫苑の事が気になるようで、戸口の前でおっかなびっくり二人の戦いを見守っていた。

「だーいじょうぶっしょー。あんだけ熱くなってるじゃー」

「佐助殿……」

その隣に、音もなく佐助が現れる。普通は熱くなればなるほど危険なのだが。

「それよりも自分の心配をした方がいいんじゃない？何が起ころるか分かんないんだから、念のため中に入っとけば？」

飄々とした口ぶりでそう言って、すぐに姿を消した。

「……………」

ぎゅう、と。首から下げた飾りをきつく握る。

二人の戦う様を一瞥した後、自宅の出入り口に手をかけた。

おかしい。さっきから幸村の動きがない。

「幸村！……いつまでこんなん続けるつもり！？」

炎を薙ぎ払いながら怒鳴る。前が見えないからその方向に彼がいるかはわからないけど、

「あー!!」

しまった!と思った時はもう遅かった。慌てて首だけでも横を見る。

真紅の鉢巻きが、生き物のようにつねっている。

滑り込んできた幸村が両手の槍を構える。ヤベえ!!

「隙ありiiiiiiiiiiii!!」

「うあッ!!」

刀、構え直す暇はない!!

「くッ!!」

一直線に突っ込んできた幸村を、身を反らせて何とかかわす。でも相手はそれだけで終わらず、槍を横に振りはらってきた。今度は刀で受け止める。

火花がバチバチと散った。

「…はッ!!」

お互いに飛び、距離をとった。…きつと幸村も私も、同じ事考え
てる。

次で決める気だ。

「天ツ！！覇ツ！！絶槍！！！真田幸村、いざ参るっっっっっっっ
うっっっっっ！！！！！！」

そう吠えたけりながら、幸村は炎をまとい突貫する。

…相手がそう出たのなら、私も同じように出るのが道理！！

「異世コトヨの秋花、それが我が名！！我今、大手を振って罷り通る！！
！！」

大地を駆けた。幸村の炎に真っ向から向かって。

「らあああああああああ！！！！」
「あああああああああ！！！！」

空気が、揺れる。

其の拾 白妙のシノビ(前書き)

しいVS幸村決着。

そして新キヤラ登場。ごめんなさい、また増えました。

其の拾 白妙のシノヒ

「……うっ……」

全身が打ちつけられて悲鳴を上げていた。周りは煙が立ち込めていて、よく見えない。

私は幸村に力負けして吹っ飛び、近くの木に叩きつけられた。一瞬息が詰まったけど、手にした刀はなんとか離さなかった。

(ヤバい、幸村は！？姿が見えない！)

立ち上がろうとしたけどできずに、バランスを崩して前のめりに倒れる。

まさかと思って手で触れてみると、さっきの衝撃で折れたらしいデカイ枝が乗っかっていた。

(これじゃ動け…！)

「おおお おおおおおおおお！！！」

「！！」

叫び声と共に、煙の中を突っ切って幸村が突撃してきた。うおっ、これ防げるか！？

「くじッッッ!!」
「ッッッ!!」

目の前で、二槍が止まった。

「……え?」

「……」

「ちょ、何止めてんの幸村」

「……」

「まだ勝負は終わってないよ!? まあ今、ちょっと動けないけど、でもまだ戦えるからさッッ!!」

「……」

ガシャガシャとうるさく音を立てて、槍が地面に落ちる。呆気にとられてると、幸村は膝をつき頭を下げてきた。

「申し訳ありませぬ紫苑殿!! 某つい熱く滾ってしまい、女子にこのような事を……!!」

「え? え?」

何かとんでもない事をしでかしまつたみたいな口調で言われるけど、不思議と怪我はないし、あっても軽い打ち身くらいだと思うんだけど…。足も木が乗っかってるだけで骨が折れてるとかなさそ

うだし。

「べ、別に気にしてないから！！ほら顔上げて、って動かねええええええええええ！！」

恐るべし、板子ヨコ。

ということ。私にとって初戦、対幸村との戦いは、両者が戦えるような状態じゃなくなったので引き分けになったのだった。

「あー。やっぱりこうなったねー」

はは、と軽く笑いながら、佐助は寺子屋の屋根に腰を下ろした。何となく分かっていた。大将との殴り合いでどれだけ昂っていたとしても、これがただの手合わせだとしても。やはり自分の雇い主に、女に手を上げることができないだろうことは。

それにしても結構ドンチャンやっちゃったけどねえ。

ちら、と横を見れば、屋根の一部分　といえどそこそこの広範

囲　は、幸村の炎によって燃え、ぶすぶすと燻くすぶっていた。

大方、旦那が放った炎をあ髪の毛長い姉さんが切り裂いた時、こっちに飛んで来たんだらう。

周りの物をぶち壊すのはいつものことだが、民家を焼くのは勘弁してもらいたい。

「怒るだろうなあ。寺子屋の姉さん」

「うちの先生は気にしませんよ。んなこと」

と。

真横から。屋根に乗っている自分の傍らから、声が聞こえた。

「…は？」

「っていうより、気にならないんっすかねえ？…まあいいや。とりあえずあの人はちまちましたことを気にかけるような人じゃないんで、あんたも気にするだけ無駄っでもんですよ」

まるでずっと前からそこにいたかのように、大儀そうなゆったりした声が佐助に語りかける。その後少し遅れて鼻を突くのは、むせ返りそうになる程香る煙草の匂い。

（こいつ、いつから…ッ!?!）

いつからそこにいたのか。忍装束の男が、彼と肩を並べるように屋根に腰掛け、煙管の煙を燻くゆらせていた。

真田軍の忍ではないことは一目瞭然だった。…それほどに、独特な出で立ちだったのである。

忍ぶにはあまりにも目立つ、混じりけのない白髪。

顎の下まで垂れ下がり、顔半分を覆い隠す程に長い、右の前髪。

鮮やかでもあり、同時に毒々しい切れ長な、緋色の瞳。

そして何より目を引くのは、僅かに露出している手や首巻きから垣間見える頸部等に施されている、鎖状の入れ墨だった。

まるで、この男が何かに縛られている証のような。

歳は若いように見えるが、しかし何処か物憂げな立ち振る舞いが、若人の持つはつらつとした動きと相反している。

そんな異形の男が、自分のすぐ脇に現れたのである。

忍である自分が気付かないほど、唐突に。

目の前の男は空気が張り詰めた事を察してか、緩慢な動作で両の手を顔の横まで上げる。

「あー、早まらんで下さい。別にあんたとやりあう気はないっす」
器用に煙管を口に銜えたまま、淡々と言葉を零す。

「…あんた、あの寺子屋の姉さんの知り合い？」

「言ったじゃないスか、先生って。俺ああの方がやってる寺子屋の助手っすよ」

あっけらかんと言う。…分かりやすい嘘にも程がある。

「忍を助手にする教師って聞いたことないけど？主従関係って色

々あるけど、そこらの普通の民につかえる忍者なんて、俺様初耳だね」

口元に笑みをたたえながらも。佐助の瞳はすう、と細まった。

「あんた、どこの忍だ。誰かの命令でここに忍んできたなら俺様、少し手荒いことしちゃうけど？」

「どこもそこもないっすよ。それより勘違いしないで下さい。元、忍っすよ、俺あ」

あんたも聞いたことくらいあるんじゃないスカ、と前振り呟かれたのは、ある国の名だった。

「…ああ、あの中国の？」

確か瀬戸内海に面した、小国ながらも富んでいた国だったはずだ。

「そ。一応俺はその国主に雇ってもらってたんスけどねえ」

上げていた片方の手が煙管を掴み、口が吸い口から離れる。それと同時に灰色の煙が吐き出された。

「まあ知っての通り、あそこはどこぞの海賊さんに潰されたんで俺、職失っちゃったんスよ」

気だるそうに煙草を喫しながら、そうあっさりとは抜かず。

「で、あてもなく彷徨ってたらここに着いたんで、たまたま遇ったあの先生の手伝いをする代わりに、家に泊めてもらってるんス」

「へえ。…いつから？」

「三年前」

「な…ッ！」

三年前と叫びたら、あの国が滅ぼされた直後のはず。

それほど前から甲斐にいたのなら領民が、何より俺が気付いたはずだ。

はったりか？やはりどこかの回しものか…。

あ。

「んじゃ、そろそろ先生に帰ったって伝えにやいけないんで、俺はそろそろ失礼しますね。…あの姉ちゃんがどなたなのかも聞いた方がよさそうですし」

「なあ、あんた」

ゆっくりと首だけをこちらに向けた、忍の紅い瞳を真っ直ぐ正視する。

「もしかして、ニシクニ西国の紅螢か？」

「……………」

「他所様で何て呼ばれてるかなんて知らないっスよ」

あくまで面倒臭そうに、そう答えて
現れたときと同じく忽然と、その忍
せた。

紅暁クキョウはその場から消え失

其の拾 白妙のシノビ（後書き）

後半ずっと紅暁さんのターンー！でした。

今さらですが、オリキャラが出張りまくってる気がしてなりません。すみません…！

ちなみに、異様に彼のビジュアル設定は凝ってます。

なぜしいとかの設定はほとんどないのかというと、ヤツらの容姿は好きなように想像してもらいたいからです。ですので描写も最低限度にさせていただきます。

其の拾巻 蛭とのチギリ（前書き）

今回はバカテス見ながら書いたので、途中それっぽいやいテイストになってます。

文がいつもよりちみっと長めです。

其の拾壹 蛭とのチギリ

あのあとはまた大変だった。

とりあえず足に乗った枝除けようとしていたら、幸村がならば某が！って二槍構えるし。殺す気か！って怒鳴ったら何とか大技出すのは思いとどまってくれたけど、枝どかしたあとはお姫様だつこで家まで運ぼうとするし。あれですか幸村、天然ですか。私を羞恥心で殺す気ですか。

帰ったら帰ったで、佐保さんは怪我ないかって大騒ぎするしで、結局ごはんにありつけたのはかなり遅い時間だった。空腹で死にそうになるってああいうときの事を言うんだね、なるほど。

「あれ、もう部屋に戻るの？」

「ご飯食べてすぐ立ち上がると、そう聞かれた。

「はい。色々考えなくちゃいけないことがあるんで」

「少しだけ笑って、居間をあとにする。

「…そう。もっとしっかり考えなくちゃ。

「これからどう動くか。」

紫苑が居間から姿を消した直後。

突如白髪の忍が、佐保の真後ろに出現した。

「戻りました」

佐保は忍に対して驚きの顔は微塵も見せず、逆に嬉しげに笑いながら振り返る。

肩にかかるほどの長さの、くすんだ褐色の髪をなびかせながら。

「お帰り紅暁。今回はどこに行ってたの？」

「北の方をブラブラと。やっぱり寒いっスねえあそこは」

砕けた口調で話すが、表情は微塵も動かない。気だるそうな、倦けん怠たい感溢れる無表情である。

「色んなところに遊びに行くのはいいけど、せめて突然いなくなるのはやめてほしいな」

少し苦笑しながらそう言った。同年代の人間に話すような口ぶりだが、彼は彼女より十以上は年上なのだ。

「それよりも、俺がいない間に居候が増えるんですけど。誰スかあの姉ちゃん」

「しいちゃんのこと？旅人さんらしくてね、泊る所がないらしいからここに住んでもらってるの。紅暁がいない間に私、侍さんに斬られそうになって。そこを助けてもらったお礼に」

…ピクリと。僅かに紅暁の手が動く。

「行っちゃ駄目だよ」

彼のその後の動きを制するように、強く言い放つ。

「大丈夫。ほら、見た通りほとんど怪我はないし、あのあとみんな捕まったから。信玄公がしかるべき処置をとってくださいさと思う。」

…だから行っちゃ駄目。ね？」

「……へいへい」

渋々と、頭を掻きながらも頷いた。佐保も顔をほころばせ続ける。

「それじゃあ、帰ってすぐで悪いけど、しいちゃんにあいさつでもしてきたら？少しの間だけけど、一緒に過ごすんだから。あ、しいちゃんの本名は紫苑ちゃんね」

「りょーかい。んじゃ、土産話はそのあとに」

「うん」

そう答えた時には、すでに紅暁の姿はなかった。

自室に続く廊下を歩きながら、むつと頭を捻る。

(あの時の佐助の言い方だと、いつ始まるのかはわからなかったなあ)

川中島の戦いは、時刻はともかく日が落ちてからの戦いだったはず。

武田では信玄のおっさんが、幸村に『啄木鳥の戦法』を伝えて別働隊を率いさせる。

上杉はその別働隊と、横槍を入れに来た一軍の動きを知りつつも、信玄との戦に臨む。

そしてその一軍　伊達軍は、両軍にたどり着く前に別働隊に出くわし。

伊達政宗と真田幸村が、魂をぶつけ合う。

「間違つてない、…よね」

問題は、この戦が正確に何日後に始まるのか。

…元の道筋と、どう外れてしまうのか。

最低限度なくしてはいけないシーンは、もちろん蒼紅の出会い。

この二人が遇わなければ、物語の根本から崩れていく。だから幸村は必ず別働隊として動かないといけないし、伊達軍は…。

冷や汗がすう、と首筋を伝う。

…もし、伊達軍が漁夫の利を狙い、進軍を……していなかったら？

そうだとしたら、あの二人はどうやって出会ったろう。

記憶をさかのぼってみても、こっちにきて伊達の話は一言も聞いてない。そりゃそうだ。

もし物語通りなら、伊達軍は武田・上杉を奇襲するつもりで動いているはずだから、ここらの人達があいつらの動向を知ってるわけがない。

「…ッ」

どうする！？私に伊達軍の動きを知る方法なんてない。佐助辺りなら知ってそうだけど、ただの旅人の私に教えてくれるわけがない。怪しまれるのが関の山…。

乱暴にふすまを開く。ドカドカと入り、刀しか置いてない殺風景な部屋の中で立ち尽くした。

「……どうしよう」

「何がっスか？」

「うわああああ！？」

後ずさりながら振り向くと、バサラのなありえない目の色と入れ墨をしている忍さんが、壁にもたれかかっていた。

「だッ、誰あんた！？」

アニメにもゲームにも未登場だけど、真田十勇士の一人とか！？やっぱここに来る時入国許可っぽいのもらっておくべきだったのか！？

「それを説明したいんスけど、……んな敵意むき出しで怒鳴らんで下さい。別に取って食やあしませんよ」

手を振って否定のジェスチャー。そ、そうなのかな…。確かに殺気とかないけど…。

「…ってことっス」

「まさか、アンタが佐保さんの言っていた助手だったとは…」

百歩譲って助手が忍者つてのもありだとしても、それがこんな奴つてのはどうよ。

「チャラ男だ…。ものすっごいチャラ男だよ…」

「……チャラ男？」

「あっ、ごめんごめん！こっちの話！」

紅暁さんの目が細まったから慌てて首を振る。危ねえ、ここでは造語は通じないんだった。変に思われたかな。

「それで？紅暁さんは私に何のよ、」

ズボツ (紅暁さんが私の懐に手を突っ込む音)

ブンツ (私の拳が空を切る音)

サツ (チャラ男が手を突っこんだまま拳をよける音)

「危ないじゃないっすか」

「殴らせる！！その顔ひしゃげるまで殴らせるおおおおおおおお
おおおおおお！！！」

おんどれえええええええええええええええこの白髪ああああああ
ああああああ！！！！何の脈絡もなくタツチしてきやがつてええええ
ええええええええ！！！！早く手エどけるおおおおおおおおおお
お！！！！

「別にあんたの山に興味ないっすよ。ええと……、これか？」

そう言つて懐から手を抜く。殴りかかろうとげんこつを振りかざ
して、…そのまま止まった。

「……あ……」

紅暁さんの手に握られていたのは、…私のアイポッド。

「………」

さつきから無表情だったのに、今の彼は僅かだけれど目を見開い
ていた。

背筋が凍りつく。絶対にこの世界の人たちには見られちゃいけな
い物なのに、こんなにあっさりで見つかるなんて。

「……これ、あんたの？」

黙つたらそれだけでイエスになるとわかっているのに、言葉が出てこない。思考回路が完全に止まっていた。

「…なあ、あんた」

「もしかして、元の世界の人間か？」

「……息をのむ。」

下げかけていた顔を上げて紅暁さんを見ると、彼は無表情で私を見つめていた。じいっと、鋭いまなざしで。

「…うん。トリップしてきたの、あっちから。紅暁さんも…？」

聞くと、彼はふる、と首を左右に揺り動かした。

「いや。オレは正確に言えば元の世界の人間じゃないっす。向こうではもう死んでます」

「え。…じゃあ…？」

「転生、つてやつですかねえ。次目を覚ました時は赤ん坊でしたし。そこそこデカくなるまでここは戦国時代だっと思ってたのに、実はバサラの世界だったって知った時の衝撃はほんと半端なかったっすよ」

まさか、…私以外にも、元の世界から来た人がいたなんて。

「確かオレが死んだ時は…、ハレンのアニメ二期が始まった頃だ

「たったスかね」

ズツこけた。

「そういう説明の仕方！？もうちょっと他の言い方なかったの！？いや、ちゃんとわかるけど！」

「なんだわかるんスか。もしかしてあんたもそういうクチ？思ってたんですけど、シオンってひらしのあの人の事？」

「違う！！私は某爆乳姉妹の妹から名前をとったわけじゃない！そもそも漢字が違っわ！！」

この人、何で私の名前が偽名って前提で話してるんだろう。

「で、園崎さんはいつ頃からこっちに来たんスか」

「園崎さん言うな！！……えーっと、そのハガ ンがもう少しで終わるかなーって所」

このあと何のアニメが来るんだろうって、話の分かる友達と語った記憶がある。

「へえ。…それで、あんたはこれからどうするつもりなんスか？旅人って先生達には言ってるみたいっスけど。これから全国の武将に会いにでも行くんスか？」

その言葉で、私の現実を思い出す。…同時に、あることが閃いた。

「ねえ紅暁さん。貴方忍だよな」

「元です」

「関係ない！あのさ、お願いがあるの。今の伊達軍の動きと、川中島の戦いがいつ頃始まるかが知りたいんだ。もし知ってるなら教えてほしいんだけど」

く、と、紅暁さんの眉がほんの少し歪む。たまの表情変化も微妙過ぎるよ。

「別に教えてもいいですけど、なぜですか？なんか訳ありなんですか？」

私は洗いざらい、全部彼に話した。そのうえで、今はどうやっても情報が足りないから、力を貸してほしいと頼んだ。

「お願い！今、私には貴方しか頼れる人がいないの！助けて！！」最後の方はもう、懇願に近かった。

紅暁さんは終始表情を崩さず聞いていたけど、私がそう叫んだ後もしばらくは無言だった。

…ダメだったかな。

そう諦めかけた時。彼の口から長いため息がもれた。

「……約四日後です。始まるのは」

「…え」

「伊達軍は話通り、川中島へと向かっていますよ」

やれやれ、と呟いて、淡く光る瞳が私をとらえる。やっぱり感情が分かりにくい、だるそうな顔だった。

「いいっす。協力しましょう。ただしオレもやらなきゃいけない事、やるべき事があります。だから手伝える事は本当に微々たるものっすよ?」

「あ、ありがとうございます!ありがとうございます!」

「気にしないで下さい。これくらい」

よ、よかった! やつと頼れる仲間ができた!! これで何とか乗り切れそう!

もう一度お礼を言おうと口を開きかけた時だった。

「…死にそうになったらさっさと逃げますから」

聞こえないかと思っていたのか、小さくボソリと呟いていた。どうしよう、不安で胃がねじ切れそうだ。

其の拾巻 蛭とのチギリ（後書き）

次回、虎ノ国最終話です。

ついに！ついにあの方が出ます！

終章（前書き）

約二週間ぶりの投稿です。遅くなってすみませんでした…！！
そしてさらに申し訳ないことに、次回からは亀後進になると思いま
す。今回よりもっと間隔が開く時があるかもしれません。
学業の忙しさもさながら、これからはアニメ内容にも入るので、も
っと勉強しなくてはというのが大きな理由です。
こんなですが、ゆっくりペースでも投稿していきたいと思いますの
で、どうかお付き合ってください。

終章

自国を、 虎の国を背に馬を走らせ、どれくらい経っただろうか。おそらく、そろそろ国境に差し掛かる頃合いだろう。

幸村は前方を、自らの前を往く信玄を見やる。

(…感じる)

その背からでもはつきりと。
疼く魂の鼓動を。

宿敵と相まみえる刻が近付きつつある今。それに比例して信玄の覇気も、目に見えるかと錯覚してしまうほど熱く。
しかし静かに燃え盛っていた。

「佐助。上杉の動きは」

「全くなしです。大方こつちを迎え撃つ気なんですよ、謙信公は」

「…ふ。彼奴らしい」

主君と配下の忍の対話を聞きながら。幸村は何かに気づいたのか、自らの胸に手を当てる。

「…？どーしたの旦那。どっか苦しいわけ？」

「っ！い、いや！！大事な。心配するな、佐助」

「旦那がそう言うのなら別にいいけど。…じゃ、俺様も少し情報集めてくるわ」

「頼んだぞ!!」

はいはいと頷いた次の瞬間、彼は一陣の風と共に姿を消した。

「……………」

胸に当てた手が、拳を形作る。

己が槍おのを操る時と変わらぬ力で、強く握りしめた。

気付いたのだ。自分自身も信玄のそれに劣らない程に、滾っている事に。戦へ向かうとき心が昂るのはいつもの事だが、それでもこの豪炎のように盛る感情は、生まれて初めて感じるものだった。そう。まるで。

(今の、お館様のような)

「幸村よ」

「は、はっ!!」

我に帰ると、信玄の両の眼まなこが幸村を強く見据えていた。

「存分に暴れるがよいぞ」

「わ、わかり申した！この幸村、甲斐の虎の名に恥じぬよう、全力で敵を打ち倒してみせましようぞ！！」

彼がそう豪語したのを確かめて、信玄は体の向きを元に戻す。

…彼は、笑みをこぼしていた。

しかし、その真意が幸村に伝わるのは、もう少し先の話である。

果てなく続く蒼穹を、見上げる。

白く端正なその面おもてに、微笑を湛えながら。

「…謙信様」

その隣に、見目麗しい一人のくのいちが現れた。

「どうでしたか、つるぎ」

君主　上杉謙信は蒼空から目を離さず、問いかけた。つるぎと呼ばれたくのいちは、謙信の美しい横顔に頬を染めながらも、伝えるべき旨を口にする。

「…武田軍は今、国境近くまで来ているようです。進軍速度からし

て、戦が始まる時刻は日没後になると思われます」

「甲斐の虎…。もう、そこまで」

柔く微笑みながら、独り言のように呟く。

「かすが」

自らの名を呼ぶ謙信に驚き顔を上げると、吐息すらぶつかる位に軍神の顔が近付いていた。

「…あっ！」

くのいちは距離をとることにすらできず、ただ相手の濡れた瞳を見つめることしかできない。…細い指が、彼女の顎を撫でる。

「此度のいくさも、激しきものになるでしょう。…ですが、いくさばでその命を散らすこと。してはなりませんよ」

「…あ」

「わたくしの、うつくしきつるぢね」

「……謙信…様ッ…！」

改めて言うまでもないが、ここは兵達が陣を張る立派な戦線である。

そのような殺伐とした場所で、西洋の花々に囲まれ身悶えする忍には、どこから突っ込めばいいものか。その様子は、中々に感慨深

いものであった。

出発する支度は本当にあっさりしていた。元々荷物なんてほとんどないし、唯一馬だけはどうしようかなと思っていたけど、紅暁さんがどっかから調達してくれていた。…よそ様からかっぱらってきたものでないことを祈る。

「しいちゃん。これ、お弁当ね。日持ちするはずだから、お腹が減った時に食べて」

里を出ようとした時、佐保さんが見送りに来てくれた。両手に抱えた大きな風呂敷を渡してもらった。本当、最後まで迷惑かけちゃったなあ。

ちなみに紅暁さんの事は、道中まだ分からないことも多いからしばらく付いて来てほしいという、かなり適当な嘘をついた。但至少も疑わず快諾してくれる辺り、佐保さんはけっこう天然なのかもしれない。

「これでお別れ、…かな？」

「…そうかも、です」

お互い顔を合わせて苦笑する。短い間だったけれど、本当のお姉

さんのように優しく接してくれて、とてもうれしかった。もっと一
緒にいたかったけど、そうも言ってもらえない。

私は願いの為に、やらなきゃいけない事がある。

「さよならは言わないよ。…またね、しいちゃん。また会おうね」

「はい！」

「約束だからね？」

「うん！絶対！」

ふわりと笑う佐保さんに、私も笑い返す。…そつと、彼女の手が
首飾りを握ったのを見て、あつと思つた。

「ねえ佐保さん、その首飾り…」

「え？」

「あ、いや！何でもありません！それじゃあまたいつか…！」

うりゃつと馬に飛び乗って、手綱を握る。それだけで馬はものす
ごいスピードで大地を駆けていった。

「へー。初めての乗馬にしちゃ上々じゃないスか」

「そうだねー。なんでだろ？これもこつちへ来て得たスキルとか？」

並走する紅暁さんに首をかしげてみせる。こういうのもバサラだ
からしょうがない、ってことでいいのかな？うん、そうしとこつ。

(しかし、今さら後悔してきた)

あー、やっぱりあの首飾りのこと聞いとけばよかった。おもしろい形してたし、肌身離さず持っていたから、なんかいわく付きなのかなって思ってたんだけど。

「ねえ。これから私、どこに行けばいいの？」

一応、目の前に広がる道を突き進みながら聞く。

「とりあえず、伊達さんと真田さんが出会うあの場所とかどうスか？あそこはあの二人が来るまで人がいないでしょうし。あんたくらいならどこにでも隠れることができるっしょ」

ふむ、なるほど。確かにあそこなら、武田・上杉・伊達、どの軍でおかしくなことがあっても、馬をかつ飛ばせばギリギリ間に合いそうだ。

「じゃあ道案内よろしく！紅暁さん！」

「あいよ」

「行くぜ馬男！目指すは川中島だ！！」

「ヒヒイイイイン！！」

「実にストレート且つかわいそうな名前っスね」

「放つとけ！」

風を感じながら、手綱を強く握る。

これから始まる。

絶対に帰ってみせる。元の世界に。

ある山路を駆ける、竜が一人。

彼の率いる兵達は、本当に奇襲のつもりなのかと疑ってしまいう程に騒々しく。猛る彼らの掲げる旗には、竹に雀の紋が印されていた。

「政宗様！ここらで一度、馬を休ませてはいかがですか！」

前髪を全て後ろへ流し、頬に傷のある男が、隣を走る若者に叫んだ。

伊達軍軍師 片倉小十郎である。

「An?何だ小十郎。こんな山の中でIntervalでもとろうつてのか？」

隻眼の青年の唇は、そう南蛮の言葉を交えながら。自身の被る兜の三日月よりも鋭く、弧を描く。

「このまま川中島へと向かえば、馬も兵も少なからず消耗するはず。今回は奇襲であるゆえ、まだ武田も上杉も我らの居場所までは気付いておりません。敵の陣内に入る前にここで……」

「Ha!休憩だあ?…おいお前、お前の脚はこれ位のDistanceでへバツちまうもんじゃねえだろ?」

自身の愛馬にそう語りかける。それを合図にしたように彼の馬は

一声嘶き、あっという間に速度を上げ小十郎の馬を追い抜いた。

「…上等だ。おいお前ら！人間様が馬に引けを取るんじゃないぞ！最後まで付いて来い！！You see？」

「…YEAHHHHHHH！！！！」

大地を震わせるかの如く、兵達の吼え声が響き渡る。筆頭に続け
と言わんばかりに、次々と小十郎を抜いていった。

彼は、顔に出さずも驚いていた。…自分を追い越す直前に見た、
主君の表情。

(あれほどに昂る政宗様は、俺でも見た事がねえ)

両軍の虚を突くのを楽しんでいるでもない。これからの戦に心躍
らせているのとも、…何か違うように思えた。

「どうした小十郎？これから折角チャンチャンバラバラするってん
だ。んなシケたツラすんじゃないやねえよ」

「…はっ！申し訳ありません、政宗様！」

鋭い声で答え、馬の腹を強く蹴る。開かれた距離を難なく詰め、
竜の右目は再び彼の脇に並んだ。異名と同じく竜に従うその姿、見
事なものである。

「OK、Guys!! 虎と軍神の大戦!! オレ達もそこで派手なPartyと洒落こもっじゃねえか!!」
「「「YEAHHHHHHH!!」」」

己の得物であり、同時に竜の爪である六つの刀を振るう刻を、待ちわびながら。

伊達政宗は戦場へ向かう。

宿命の邂逅へと、臨むように。

終章（後書き）

虎ノ国、最終話でした。

筆頭やっと思せたー！しかしこんな感じですかね伊達主従：（汗）。
けんしんさまは逆に難しかったです。彼（？）はオール平仮名じゃ
キツそうなので、少し漢字混じりです。

茶の湯の会 〱武田屋敷より〱 (前書き)

やっしまった…。

かすがちゃんとか書き慣れてないので、ちょっとおかしいかもです。

茶の湯の会　〜武田屋敷より〜

紫苑 「はい！この回は第一章 虎ノ国 終了祝いということ！この章で登場した方々に今章の感想や今後の展開について等々、好きなことをくつつちゃべつてもらおうじゃないかと思いい開かれた茶会でござります！」

紅暁 「ひ　らしでいうお疲れ様会、う　ねこでいうお茶会っスね」
佐保 「この回は全て会話形式で構成されます。また、この回で行われる全ての会話は本編に関係ありません」

紅暁 「何かのフラグっぽいのは出るかもしれませんがねえ。とにかく、この回を見なくても本編を読むのに支障はないってことっス。苦手な方は閲覧をお控えください」

佐保 「…ねえ紅暁？私たち誰に向かって話してるの？」

紫苑 「そーそー。いきなりカンペもらったからその通りに話したけどさあ」

紅暁 「知らない方がいいと思いますけどねえ」

紫苑・佐保 「「？」」

佐助 「おーいあんたらー。何しゃべってんのか知らないけど、早くしないと麺伸びるよ〜？」

佐保 「あ、はい。今行きます！」

紅暁 「茶会って言うてるのに煎茶でも茶菓子でもなくほうとう出しますか。いきなり斜め上をかつとんでくれますね」

紫苑 「さすがBASARA！あと割烹着装備の佐助萌え！！」

佐助 「しょうがないっしょ〜、大将が食いたいって言い出すんだからさー。それと紫苑の姉さん、もえって何？」

信玄 「佐助よ、ほうとうの数が足りぬぞ」

佐助 「あれー？おかしいな、人数分の倍は作ったはずなんだけど。申し訳ありません大将、至急作ってください」

信玄 「うむ。客人を待たせるでないぞ」

紫苑 「…普通こういうお屋敷には調理専門の召し使いとかいるんじゃないの？」

紅暁 「突っ込んだら負けっスよ。オカン属性の定めです」

紫苑 「あと、ほうとう足りないのはさあ…」

政宗 「Ha!どうした真田幸村！お前はそれでgive upなのか？」

幸村 「何を！！某食する量でも貴殿に負けはしませぬぞおおおとおおおー！！」

紫苑 「どこそこの蒼紅が頼んでもないのに闘食大会始めてるからだと思っただけど」

佐保 「わ、私、佐助殿のお手伝いに行ってくるね！」

紅暁 「先生、空気の読み方間違ってます」

紫苑 「いやでもさあ、佐保さんにあの二人止めんの無理でしょ。

信玄のおっさんはほうとう啜りながらけんしんさまとたそがれてるし、k t k rさんは…」

小十郎 「いい南瓜だ…。やはりこれは甲斐の土質が…」

紫苑 「インほうとうのカボチャに惚れてるし」

紅暁 「歪みないっスねえ竜の右目」

かすが 「……貴様らは一体何を話している？」

紫苑 「かすがちゃんキタ ……!!!」

紅暁 「上杉のくのいちさんスか。ちわっス」

かすが 「全く…。茶会を催すと聞いて謙信様と共に来たはいいが、これではただの宴会ではないか」

紅暁 「おっしやる通りっス本当に。……はあ。やっと常識人が来たと思つたら惱殺全身ボディースーツって…。つくづくバサラって何でもありっスねえ」

かすが 「何か言つたか？」

紫苑 「あーっ！あーあーあー!!」

紅暁 「不器用なフォロー、どうもっス」

紫苑 「……で、そろそろ本題に入るべきだと思つんだけど」

紅暁 「それを主人公二人組がダウンする前に言つてほしかった」

スね」

政宗 「Shit…！この俺をheat upさせるたあ…。流石じゃねえか、真田ッ、幸村…！！」

幸村 「独眼竜…、伊達、政宗… ツ…！その名に違わぬ、兵でござった…！！」

紫苑 「カッコよさげに言ってるけど全然そうじゃないからね！？ポヨンポヨンのお腹はむしろかわいいからね！？」

紅暁 『かわいい言いますかこの太鼓腹を…。猛者だ…』

佐助 「とりあえず二人とも、厠で出してくるなり体動かして消費するなりすれば？ちよ…つとその体型のままじゃキツいんじゃない？」

紅暁 「敢えて上から出すのか下から出すのかは聞きませんよ」

佐保 「うえ？した？」

小十郎 「肥やか…。それとも水質か…」

紫苑 「そしてそろそろ片倉さんは戻ってきて！麵伸びてる！むっちや伸びてる！」

佐保 「…えつと、今章の感想について、だよな？虎ノ国では武田の皆様が主でしたから、次章では伊達軍や上杉軍の活躍が見たいなあ」

紫苑 「佐保さん、ナイス方向修正！」

佐助 「そーなると、次は俺たちの出番少なくなるかもねー。出来るだけ出たいけど、そうもいかないかあ」

紅暁 「そーろそろ伊達さんにパ…リイしてもらわないと、こんな小説（笑）を読んで下さっている政宗ファンの皆様に応えありませんからねえ」

かすが 「私と謙信様の出番も忘れるな、この入れ墨男」
紅暁 「へいへい、もちろんっすよ」

かすが 「地味にだが伏線もあるしな。どこでどう回収するつもりかは知らないが」

佐助 「あの妖しげな店主さんと姉さんの接点とか、なんでこの世界に来ちまったのかとか、寺子屋の姉さんの首飾りとか、まあ色々だね」

佐保 「私の伏線が回収されるのは当分あとだろうけどね。これから結構の間、出番ないから」

佐助 「あ、確かにね。寺子屋の姉さんのポジションは民だから、中々動きにくいよなー」

佐保 「それもあるけど、この話のヒロインはやっぱりいいちゃんだから。私はしばらく静かにしてるね」

紫苑 「あ、ありがとうございます…！」

かすが 「泣くな…。これしきの事で」

紅暁 「『ヒロイン』って事は…。あんた、だれかとくつつくってことっすか？」

紫苑 「だろうねー。ちゃんとそこまで話が進んでたらの話だけだよ」

佐助 「この小説（笑）の題名見たら、何となく相手分かるような、そうでもないような気がするけど？」

紫苑 「まあでも、予定は未定ってことで…！」

佐助 「……あ、そろそろ終わる時間？」

かすが 「なぜ貴様に分かる」

佐保 「政宗殿と幸村殿、まだお帰りにならないのかな…」

紫苑 「まあ次の茶会ではいやでも二人メインなんだから別にいいでしょ！」

紅暁 「これ次もあるんスカ」

紫苑 「アクセス解析の話別ユニークがひどいことにならなかったらね！それじゃ誰に言ってるのか分からないけど、今回はこの辺で！」

佐助 「あ。伏線で思い出した。そういやあんたの国って海賊に滅ぼされたって言ってたけど、もしかして」

紅暁 「富嶽！富嶽！富嶽！チクビ死ぬ！」

佐助 「ちよっと！？キャラ変わり過ぎでしょ！？」

茶の湯の会 〱武田屋敷より〱（後書き）

遅れましたが、ユニーク1000突破記念という意味でも書かせて頂きました！

この駄作をここまで読んで下さいました皆様、本当にありがとうございます！そして本編全く関係ないお話で、次回期待して下さいました方々には申し訳ない…。

しかし、しかし！4ケタ行きました！うおおおおお4ケタ！この調子で目指せ5ケタ！！

序章（前書き）

ついに本編突入！
ですがしよっぱなから雲行きが…。

序章

天空の星々の光すら届かない、鬱葱と生い茂る雑木の林。暗闇の中、金属音と共に火花が散る。両者は常人に決して出せぬ速度でぶつかり合いながらも、勝負の行方はその動きを捉える事が出来る者から見れば 明白だった。

「……がはッ！」

地面に叩きつけられたくのいちの口から、赤が散る。

「いーかげんやめときなつて。俺別にお前と戦いたくないしさー、早く引いてくんない？」

大型の手裏剣を指で回しながら、猿飛佐助は大振りの木の幹にもたれかかる。余裕の表れを全身で示す彼とは対照的に、かすがの口からは荒い呼吸ばかりが漏れた。

「……戯言を……ッ!!」

彼女の全身が苦しみを訴えている事は目に見えて明らかだった。双眸が痛みに歪んでいく。

だがしかし。どれほど歪になろうとも、瞳から闘志が失せる様子はなかった。

「黙れ！！お前は絶対私が仕留める！！」

「熱くなっちゃってー。…だけどそんな状態で言われても、説得力ないねえ」

「うるさい！！」

叫びと共に放たれた無数の苦無は難なく弾き返され、地面や木々に突き刺さった。

「こえーなー。何もそこまでカリカリしなくてもいいっしょー」
「くッ！」

からかう様に笑っていた彼だったが、…段々と、その笑顔が無機質なものになっていく。

古い馴染みへと向けていた笑みが。
忍としての貌カオへと、豹変していく。

「ま、俺もいつまでもこんなところで遊んでる訳にはいかないからさあ」

のたまいながら、足元の苦無を一本引きぬく。

「！」

かすががそれに気づき構えた時には、すでに目の前に佐助の姿は
なく。

「……どいてもらっせ。かすが」

首筋に、得物が宛がわれる。
かすがが振り返ったその瞬間。

鮮血が飛び散った。

其の壱 小さなイワカン（前書き）

今部活に出すオリジナル小説を執筆中なので、次回の投稿は二か月ぐらい開くかもしれません…。申し訳ないです。

紅暁「ちやつちやと話先に進めてくれませんと困るんすけど」
紫苑「そーそー。話引っ張るのもほどほどにしなよー！」

うぶっ。

其の壱 小さなイワカン

「くさい」

偵察から帰って来た人に掛ける言葉じゃないって分かってるけど、
そう言わずにはいられない。ジト目で睨んでも相手はどこ吹く風で、
煙管からニコチンを吸い込んでいた。

「聞こえてない！？ならもう一回言っよ！？く・さ・い！！私煙草
苦手なの！もう少し自重してよ！」

「善処します」

「八橋、じゃなかった、オブラートに包むな！！」

無表情棒読みで言われると、ふざけてるのかどうかさえ分かりに
くい。

「思っただけどき、曲がりなりにも元忍者が戦場でスパスパやって
ていいもんなの？においとかでバレるんじゃない？」

「戦場でアニソン無限ループしてる人に言われたかないっスね」

うっ。

「あ、あはははは！！何言ってるんのくぎよさんこれは余裕！！余裕
の表れさあ！！べ、別に緊張しすぎて気を紛らわすために聞いている
とかそんなんじゃないんだから馬鹿ア！！！」

「なるほど、よくわかりました」

分かってくれたようだなによりだ。…その視線が妙に冷たいのが気になるところだけだ。

「まあ、何をどうしようがあんたの勝手ですからとやかく言う気はないっすけど。とりあえず敵に見つかりたくないんなら、液晶の光には気を使って下さい。もう深夜もいいとこなんすから」

そうかな。こんな茂みに隠れてるんだから、心配ないと思うんだけど。…でもこの手のプロが言うんだ。聞いていた方が無難だろう。

私たちは今、無事目的地に到着して身を隠していた。少し先にあるたいまつが弾ける音が、ついさっきまで程よい緊迫感を醸し出していた。

でもこうやって間の抜けた会話していると、雰囲気ブチ壊しだなあ。

「で、どうだった？武田も上杉も伊達も、どっか変なとこなかった？」

「普通それを最初に聞くもんでしょ」

「いいでしょくさかったんだから！」

「あーはいはい。…んじゃ現状報告っすけど。武田・上杉両軍、動きなし。伊達軍も特に変わったことなしっす。伊達さん達は、もうそろそろここに着くと思いますかね」

ここまででは筋道通りってことか。うん、順調順調。

今さらだけど、必ずしも異変がこの川中島で起こるとは限らない。何事も起こらない可能性だって十分ありえるし、少し楽観的な考えだけど、最後の本能寺の変まで普通に事が進むかもしれないのだ。

…逆に言えば、毎度毎度どっかがおかしくなってるって状態もあるってことだけど。

とりあえず、今回私が最も注意すべきことは、この場所で伊達政宗と真田幸村を会わせること。今はそれだけを念頭に置いておけばいい。そして今はどの軍も変わったことなし。もしこのままだったら、今回は二人の戦いを見るだけで済むかもしれない。

ラッキーなはずなのに。……なんでだろう。
何かが噛み合っていない気がする。

「…日の出が近いつスねえ」

独り言のように呟く紅暁さんの言葉につられて、空を見上げる。
まだまだ濃い藍色の空に、太陽が昇る気配はない。

「…そうなんだ。やっぱり忍者はこつこつというの分かるの？」
「ええ。慣れたら五感で感じ取れます」

空気が揺れるんス、とつけ加える声を横で聞く。
自分なりに感覚を研ぎ澄まして、彼の言う揺れる空気を感じ取る

うとするけれど、もちろん素人に感じれるはずもなく、冷たい空気を吸っただけだった。

「まだこんなに暗いのだね。…ふうん、もう朝を迎えるんだね」

なら。

あの二人は、これから昇る太陽をバックに刃を、魂を交えるんだ。陽の光に二人の影が霞むあのシーン、かつこよかったなあ。

「……はあ」

「？」

突然聞こえたため息。横を向けば、わずかに呆れたような表情を浮かべる紅暁さんが映る。…私、何かおかしなこと言ったんだろうか。心当たりがないから何を言い返せばいいかわからない。

「…まだわかりませんか？」

「は？」

ふらりと、揺らめくように立ち上がった彼は、片方の目で一点を凝視する。蛍光灯のように淡く、紅く光る瞳は、伊達軍がやってくるであろう方向を、じいっと見つめていた。

「まあしょうがないって言ったらそれまでっすけど。」

…あっちの方は、あなたに任せます。もう一方の方は、オレがなんとかしておきますンで」

「く、紅暁さん？何言ってるのかよくわからないよー？おーい？」

「五分持たせて下さい」

瞳孔が細まり、かつたるげな彼の顔に一瞬、鋭さが宿る。

(…?)

数回のまばたきのあと、確かにそこにはいつも通り、しまりのない表情をした紅暁さんがいた。

「ねえごめん、何の事言ってる…！」

瞬きをしたほんの少しの間に、紅暁さんの姿は消えていた。

「……………。私にどうしろっての？」

あっちを任せるってことは…………、伊達軍丸ごとってこと！？無茶言うわあのグルグル入れ墨男！雑兵はともかくあそこの大将副将一人で相手にできるかってんだ！！

ってか、今別におかしいことはないんだから、わざわざあいつら足止めする必要なんか、

「…あれ？」

紅暁さんの言葉を思い出す。

武田・上杉両軍、動きなし。伊達軍も特に変わったことなしっす。伊達さん達は、もうそろそろここに着くと思いますかね

伊達軍の動きは変わっていない。
だけど、武田上杉は動きがない？

上杉はともかく、武田にはそろそろ動きがあってもいいはず。
何の？という疑問が頭をかすめるより前に答えが見つかり、あつと息をのんだ。

其の弐 邂逅へのフセキ（前書き）

久々です！約二ヶ月ぶりです！お待たせしました！！

この間に書いた原稿が一か月行方不明でパニックりました。見つかったのが数十分前でカタカタ打ってきた次第です。

夏休みもう一週間もねえや！課題爆ぜやがれ！！

其の式 邂逅へのフセキ

「……………くっ！！」

悔しげに、唇をかむ。

何処かで自らの部下の気配はしないかと忙しく辺りを見回すが、いくら百戦錬磨の幸村とはいえ、忍のように突出した感知能力は持つていない。感じ得るのは、じわじわと全身に浸食してくる焦りのみである。

(まだか……………！まだ帰ってこぬのか、佐助……………ッ！！)

偵察に行った猿飛佐助が、出陣直後となった今になっても姿を見せないのだ。彼だけではない。陣を張り始めた直後に放った斥候でさえも、一人も帰還していない。まるで闇に溶かされて消えてしまったかのように。

何者かに襲撃された可能性が、刻一刻と現実味を帯びていく。

「お、お館様ッ！様子を見に行かせた兵も帰ってきませぬ！」

陣内に駆け込んだきた歩兵が息を切らせて報告する。吉報を望んでいたであろう家臣たちの表情が厳しく歪む。

「……………。うむ」

重々しく答える己が師の声があまりにも胸に痛かったのか、我知らず両の拳を握りしめていた。……………せめて目に見える敵であるならば、この手でどうとでもできるといつのに。

己たちが張った陣の一寸先は、何が起こっているやも分からない。

誰もかも、うかつに動くことができない。

故に。その原因を調べる術は、ないのである。

「……これは、敵の策なのでは？」

「なッ!?」

誰かの呟くような一言が、家臣の焦燥感と僅かな恐れに火をつける。幸村が息を呑むと同時に、家臣の怒号にも似た叫びが湧き上がった。

「そうだ!! 伏兵を使い佐助殿や斥候達を襲ったに違いない!!」

「まだ開戦しておらぬというのに、何と汚い手を!!」

「な、何を申される諸将殿!! あの軍神に限り、そのようなことは……!!」

自身も憤りながら声を荒げる幸村を遮り、怒りと焦慮で切羽詰まった表情の家臣の一人ががなり立てる。

「なぜそう言い切れますのだ真田殿!! 上杉が織田を恐れ、この戦を早急に終わらせたいと手を焦っているやも知れないのですぞ!! 上杉謙信といえど人の子であることお忘れか!？」

「そ、それはッ!!」

血気迫る家臣の表情に言葉を失う。しかし彼自身も己の中の怒りを制することができず、新たに口を開こうとした時だった。

腹の底に響くような轟音と共に、足元の大地が揺れる。

「……」

お互い知らず知らずのうちに睨み合っていた彼らは、我に返ったかのように開きかけた口を閉ざし、己らの大将へと視線を移す。

武田信玄の軍配斧が、彼の目の前の地面に深々と沈み込んでいた。

「お、……お館、様……」

恐る恐るというように話しかける家臣の声は、隠しようもないほどに震えている。ビリビリと伝わってくる信玄の怒気に、完全に恐れをなしていた。血気盛んに叫んでいた家臣も、気まずそうに視線を下げる。

わかつている。皆、ここにいる武田の兵達は、長らく上杉と刃を交わしてきた者達ばかりだ。謙信公がどのような状況であれ、姑息な手を使う将ではないということとは身をもって知っている。

知ってはいても。情報が遮断してしまったこの状況の中、危機感が気持ち焦らせているのだろう。

血が滲むかと思うほど、幸村は拳を握りしめる。仰ぎ見た空の色は、今の彼の瞳には、揺らがない闇色にしか映らなかつた。

「Ha!お前ら、もうじきお待ちかねのPartyだ。くくれる腹はくくつとけよ!」

「何言つてんすか筆頭!俺達早く戦^ちりたくてウズウズしてるんすよ!」

「そつつすよ!早くその六爪で暴れて下さい!」

爆走する馬上から軽快に言葉を交わす。その声すらも、傍からすれば聞き取れるかどうかさえ怪しい。せいぜい拾^{ひろ}うことができるのは、突風のように吹き抜ける言葉の残骸くらいだろう。それほどに、彼らは速い。

彼らは知らないだろうが、知るはずもないが。この雑木林を抜ければ、松明の燃える開けた場へ出る。宿命の、邂逅の場へ。

しかし、まだ早い。

まだ、その場には、役者が足りない。邂逅の場たらしめる重要な存在が、いない。

それを伊達政宗が知るはずもなく。速く、速く、駆けていく。まるでその運命さえも一瞬で過ぎ去る風景だというように

!!!

「!!!政宗様!!!」

小十郎の叫びに、思わず馬の足を止める。

次の瞬間に聞こえたのは、空気を切り裂く何かの音。

「くッ！」

咄嗟に馬をひかせると同時に、上空からの斬撃が大地を抉った。後ろ足で立った愛馬が興奮して高く嘶く。

後ろから続いていた家臣達の足が止まった。

「!? ひつと、」

「上だ!!」

反射的に彼らは上空を仰いだ。または、木々の葉が不自然にざわめく音や一段と辺りが暗くなったことに疑問を持ち、顔を上げた者もいたかもしれない。

彼らが邁進していた、道なき道。右に左に、名も知らない巨木が立ち並んでいた道。

その上から動きの止まった伊達軍に覆いかぶさるかのようになり裂かれた木々が隙間なく倒れてきたのである。

悲鳴と馬の鳴き声、巨木が地面に叩きつけられる音。政宗は後方へと首を捻じ曲げるが、巻き起こる土煙のせいで部下達の影さえ見えない。

はめられたか……ッ！

「小十郎!! 無事かッ!?!」

「はっ! 大事ありません!」

「チイツ! 武田か上杉に勘付かれたのか!?!」

その時。

「……あーあ」

と。

政宗達のいる場より、僅かに前方。一段と高い木の幹に、月を背負った影があった。

「やっぱ、これ位であいつらの動きが止められるわけない、か。サシでも厳しいってのに2対1って。……生きて帰れるのかな、私」

たけど、たった一閃でこれだけの木を切り倒せるとは。すごいな
ーバサラスタータス。怪我した人いないといいんだけど。
しかしどうしよう。マジで5分も持つんだらうか。

「……誰だ。お前は」

警戒するように細められた左目を真っ向から見返す。幸村とはま

た違う、強い目だ。刀の切っ先のように、鋭い目。少し気を抜けば、眼光に斬り裂かれそんな錯覚さえ覚える。

だから私は、鼻で笑ってやる。恐れを気取られないように、大見栄張ってニヤついてやる。

「私？ん〜、名乗る程のモンじゃないけど、強いて言うなら……」

幹を蹴って、二人の目の前に降り立つ。刀を引き抜いた政宗にニツと笑いかけ、私自身も構えの体制をとった。

「通りすがりの、婆娑羅者だ!!」

其の式 邂逅へのフセキ(後書き)

震源は信玄(笑)。

其の参 歪むキンコウ(前書き)

(今のところ)ボツになってる奴らの設定。

しい…たまに一人称が「おじさん」になる

佐保…姓が《ピーー》

紅暁…隠さない助平

其の参 歪むキンコウ

自らの腕から散る血と突き刺さった苦無を目で捉え、猿飛佐助は苦悶の表情を浮かべた。

その隙にかすがは後ずさって距離をとり、得物を構える。そして手首を押さえる佐助を見、苦無が飛んできた方向を見、叫んだ。

「誰だ!!」

その声に驚いたか、烏が数羽煩く鳴きながら飛び去って行った。

ゆらりと。

揺れる紅色の光が、木の葉の間から覗く。

「んなかつかしないで下さい。一応俺、あんたを助けたつもりなんですかねえ」

ふう、と何かを吐き出す音と、同時に鼻をつく煙草の臭いがすぐ脇でする。その先を瞬時に目で辿ると、白髪 of 忍装束の男が気だるげに煙管をふかしていた。

下を打ち苦無を放つが、それは相手が軽く身を反らしたことであえなくかわされる。続けざまに猛攻を加えようとする彼女を、押し殺した声が制した。

「……やめとけ。かすが」

「貴様が私に命じる権利などない!!」

なおも憤る彼女に、佐助は止血する手を止めることなく静かに告げる。

「そいつは紅蚩だ」

「……！」

佐助の言葉に合わせるように、紅暁はかすがに向き直り小さく頭を下げる。当人はその行為に薄気味悪さでも感じたのか、佐助の隣までじりじりと後退した。

「貴様、生きていたのか。従っていた主と命運を共にしたのではなかったのか？」

その声には驚きはもちろんだが、圧倒的に疑惑の色が強く混ざっていた。

彼女の記憶が正しければ、目の前の忍は主人が年端もいかない頃から傍におり、その忠誠心は、少なくとも忍の間では知らぬ者はいない程に強固だったはずだ。巷では、その絶対的な忠義わけが成る理由は、まるで血を分けた間柄のみが持ち得るような絆があるからだと言うわれてもいた。

そのような忍がこうして自らの目の前に立っていることにかすがは疑問を抱くと同時に、主人を亡くしたくせにこうしてのうのうと生きている同業者に、隠しようのない程の侮蔑の念を感じていたのだった。

こうしたかすがの心境は彼女の表情を見れば一目でわかるだろうに、紅暁は気にもしないらしい。淡々と答える言葉に感情はこもっ

ていない。

「あの程度の業火で俺が焼け死ぬとでも？」

「普通は、三年も名を聞かなかつたらそう思うもんだけど？特に有名な奴はな」

受けた傷は浅くないはずだが、佐助の口調は普段と何ら変わらな
い軽いものだ。突然の来訪者にも動じていない確かな証拠である。

「まあ、俺にも色々やることができましたんでね」

そんなことよりも、と前振りをして、紅暁は瞳のみを動かし二人
の顔を見比べる。

「あんたら、自分の主の命令に背いてなあにやってんすか。いくら
偵察中に鉢合わせたからって、わざわざ戦^やり合わんでもいいでしょ
うに」

「なっ………!!」

動揺するかすがとは違い、佐助は冷静だ。手段までは見当のしよ
うがないが、相手は 現在はどうであれ 自分と同じ闇に忍ぶ
者なのだから。

「さあな。俺だってやり合いたかなかつたんだけど、こいつがいきなり苦無ぶつけてくるし、どうにも逃げれそうになかったからなあ」
「……余計なことを……！」

二人のやり取りを聞き、紅暁はなるほどというように頷いた。遠くに目をやり、煙管を手で弄びながら思案に暮れる。

「はーあ。案外簡単に予定調和つてのは崩れるもんなんスねえ。まさか、くのいちさんの腹の虫の居所がちいっとばかり悪かっただけで物語のターニングポイントが無くなりかけるとは。こりゃ、あの一人じゃどうこうならないわけですねえ」

この、独り言にはいやにはつきり聞こえる言葉に、さしもの佐助も顔をしかめた。白髪の忍の言うことが、全くもって理解できない。

彼が口を開く前に、紅暁の声が先を制する。

「御二方、ここで俺なんかとくつちゃべってる暇はないスよ。……武田、上杉は斥候とあんたらが帰還しなかつたせいで足踏み状態。そこに伊達軍が向かっています。今はなんとかどこそその旅人さんが足止めしてますが、それも時間の問題でしょうね。とっとと両陣営に戻って手を打って下さい」

自らの軍や上杉、伊達がどうなっているのかは、予測できていた。……だからこそ、かすがを殺そうなどという短絡な手段を取ろうとしたのだ。

しかし、思いもよらなかつた人物が話題に上り、我が耳を疑つた。

「旅人つて、まさか紫苑の姉さんか……!?!」

こくりと頷く。

まさか。まだ彼女は甲斐にいないのではないのか。仮にもう国を出ていたとしても

「あの姉さんが俺たちに手を貸して、何の得が……」

「あるんでしょうねえ。俺にもあの人の考えは良く分かりませんよ」

佐助の言葉を引き継ぎ、紅暁もやんわりと同意した。……もちろん、異なる世界から来た彼女が元の世界に帰るためだとは言えない。

「……何の話をしているのかは知らないが、お前がそう言うのなら私はそうさせてもらう」

「そうして下さい。別に背後を狙つたりはしませんので、気にせず軍神さんと合流してくれたらありがたいっす」

「冗談かどうかも怪しい物言いだが、一先ずかすがはその言葉を信じることにした。というより、己の主の許へ一刻も速く帰らねばという焦りと責任感が、彼女をそうさせたのだった。

最後に紅暁を一瞥し、風を切る音と共にその場を去つた。

その始終を彼は煙草をふかしなが見守り、完全に気配が消えた事を確認してから、残つた忍にゆるりと視点を合わせた。

「猿飛さんは行かないんスカ? 急がないといけないってのはあんた

もよくわかつてるでしょう」

「知ってるさ。だが、どーしても一つ聞きたいことがあってな。…
… あんたは、何の理由あってここまで出しゃばってきたんだ」

忍稼業を辞めたと自ら公言していた者が何の理由もなしに戦場に
戻ってくるなど、ありえない。しかし、紅暁の答えは曖昧にはぐら
かしたものだっただけ。

「恩は売つという損はありませんからねえ」

佐助は皮肉るように鼻で笑った。

「下心のある恩を返す義理はないね。だが、こっちの借りは……」

傷ついた腕を、見せつけるようにかざす。

「いつか返す。必ずな」

飄々とした調子に、僅かに鋭利な物を混ぜながら。

渦巻く風を微かに残し、佐助もその場から掻き消えた。

「……………」

煙を吐き出し、それが虚空に消えていくのをぼんやり見つめる。

視線をそらさぬまま、取り出した苦無を己が現れた木々の中に放つ。

縄が切れる乾いた音のあと、重い何か地面に落ちる音と呻き声が続いた。

「……………それまでに生きていたら、ですがね」

怖いつスなあと、わざとらしく呟きながら。

彼もまた他の二人と同じく、名もなき林を静かに発った。

其の四 散るチシオ（前書き）

理想 政宗を圧倒して快勝！
現実

其の四 散るチシオ

(……って、大見栄張ったはいいけどさーッ！！)

間髪入れず何度も振り下ろされる重い太刀を受け流しながら思う。そりゃ最初から危ない橋だとは分かってたけどさ、やっぱり5分とか無理だろおおおおお！！

「Ha!どうしたじゃじゃ馬女！初めの威勢の良さはどこ行ったんだ？」

「さーあ？こつちの知ったこつちゃない、…てのッ！！」

横一閃に振り払うが、少し後ろへ引いただけでかわされる。低い姿勢で前に駆けだし連続で刀を振るうが、難なく得物で受け止められる。

それよりも、政宗が未だに他の刀を抜く気配がない。私には一爪だけで充分ってことかい。

「早く馬を落ちつける！配列が整い次第強行突破する！」

しかも、片倉さんは私から完全に背を向けて部下に向かって指示を飛ばしていた。これは確かにありがたいんだけど、やっぱりなめられている証拠だと思つと悔しい。

「……………うっ……………」

刀を持つ手が、小刻みに震える。どくどくと心臓が脈打つ。視界がぐらりと傾きそうになつては気力で正す。……疲労だけが原因じゃない。

軽口を叩きながらも刀を打ち合わすたび、振り下ろすたび、垣間見える政宗の武士としての顔に、怯えている自分がいる。

畑違いの人物と洒落にならない事をしている。その恐怖がぞわぞわと押し寄せてくるのを全身で感じた。

やっぱり甘かった。戦いをなめていた。

幸村との勝負がいい感じだったから気が緩んだのかもかもしれない。でもあれは勝負というより手合わせだった。今の、曲がりなりにも戦闘とは全く違った。

それにどれだけバサラスタータスの愛されボディでも、経験値つていう面ではゼロに近いようなもんなのに……………！！

「悪いが、オレはこんなところで前とチャンバラごっこしてる暇はねえんだよ。さっさとそこをどきな」

「はあ！？あんたがこれからしようとしてんのも似たよーなもんでしょうが…！」

何か叫んでないと潰されそうな気がした。だから悲鳴を押しこんで怒鳴ると、引っくり返った声色が情けないくらい大きく響く。それを聞いて、政宗はおかしくてたまらないらしく吹き出した。

「フツ、ハハハハ！口だけは上等だなテメエは！」

「ついでに剣の腕も認めさせてやるよ！はあああああ！」

火花が散る。耳に痛いくらいの金属音が響く。二つの刀がぶつかりあう。お互いの刀を隔てて、顔が今までにないくらい近づいた。相手の口が鋭く弧を描く。私はきつくにらみ返す。

「……………gangway」

低く落ちた音にハツとした。

政宗の目。対となる右目を失った隻眼。

ふざけ半分に笑っていたその目が、嘘のように冷め切る。

ゾクリと背中を襲った悪寒は、瞳が氷のような冷たさをもっていたからじゃない。その瞳孔が、抜き身の刀のように鋭さを増したからだった。

「オレはここで二の足踏むわけにはいかねえんだよ。遊びてえなら他所でやれ」

「……………!!!!」

体の震えが止まった。

ふつつつと、腹の底から何かが湧き上がってくる。

「何が……。誰が、遊びだつて……………!!?」

「それとも腕試しのつもりだったか?……………とかく、こんな戦場に女が、」

紅い一線が宙を二つに割った。

馬鹿にするようにつり上がった口角はそのままに、見開いた政宗の左目の真下から鮮血が糸のように細く吹き出す。

その手から離れた刀が回転しながら後方に飛んでいった。

舌打ちをしながら後ずさる政宗は、腰の一爪を素早く引きぬく。

それに一瞥もくれることなく、目の前の武將に怒声を浴びせた。

「どこの世界に遊びであんたらに斬り込む馬鹿がいるよ!? あんたほど大層なもんじゃないけど、私にだって叶えたい願いがあんだ!! ふざけんじゃねええええ!!!!」

大粒の液体が一粒だけぼろっとこぼれる。悔しいのか、腹立たしいのかもよくわからないまま、声よ割れよと言わんばかりに絶叫する。

怪訝な表情を浮かべながら、政宗の眼球が私の涙を追う。

「お前……」

構えられた刀が、下ろされかけたように見えた時だった。

「進め!!!」

蹄が大地を蹴る力強い音。雄叫びのような馬の鳴き声。何を言っているのかさえ分からない数多の猛者たちの怒号。それらが乱雑に混ざり合って一つの轟音となる中、片倉さんの叫びのみが一直線に体を貫く。

どうして今まで気付かなかったのだろう。真正面から伊達軍の黒い塊が、文字通り突撃してくる。

片倉さんと並走していたハンドルの付いた馬に政宗が飛び乗った。怒りに燃える全ての兵士、馬の瞳に、引きつった自分の表情が映る。

情けない悲鳴が小さく漏れ出た瞬間。

シュツと俊敏な音が耳朶を打ち、その細く長いらしい何かが首に幾重にも巻きつく。それを両手で掴んだと同時にきつく締まり、「ぐえええツ」と似非断末魔。

両足が地面から離れた。浮遊感。右肩を下にして体が地面と平行

になる。またも丸くなった政宗の目と視線がぶつかった。

茂みに頭から突っ込んで、受け身も取れずに地面に叩きつけられる。咳き込む間もなく腹周りに誰かの腕が周り、脇に抱えられた。

「走りますよ」

紅暁さんは答えを聞かず、うめく私に気にも留めないままその場から遁走した。

其の四 散るチシオ（後書き）

あまり役に立たない英語講座

gangway: 道を開ける、どいたどいた、等。グーグル先生ありがとう。

長らくお待たせしました！久々にしいを書いたのできこちなくなっていないか心配です……（汗）。

其の伍 渦巻くラセン

地面に下ろされたあと、四つん這いの態勢でしばらく咳き込んだ。痕が残るかと思うほどきつく締まっていた何かができるりと解ける。

「とりあえず撤きました。あまり離れてはいませんが」

喉を押さえながら顔を上げると、紅暁さんがワイヤーのような長い紐を手元に手繰り寄せていた。というか、自動巻取り式のメジャ―みたいにあつちは身動き一つしていないのに勝手に手元に戻っていく。紐の一端は腰の武器を納めている辺りに繋がってるようだから、あそこになにか仕掛けがあるのかもしれない。

その間さえこちらを見向きもせず、首を上げこの山の頂辺りへと視線を走らせている。

周りは木々と草ばかり。人気はなし。これなら盛大にむせても気づかれることはない。というか、気づかれるのだとしてもこの生理現象は止められない。

落ちて着いてきた頃には、紅暁さんは丸めた紐の先に何故かくなくをくりつけていた。近い巨木にそれを放つと、剣身が見えなくなるほど深く突き刺さる。紐を引っ張り、抜けないことを確認すると、早速煙管を口にくわえた。鈍色の煙を大きく吸い込んでしまい、またむせ返る。

「も、もっと、別の助け方、あつたんじゃないの……！」

上目遣いで睨むが、相手はどこ吹く風だ。顔には吹きつけてこなかったものの、大きくはいた煙がこの場に充満する。

「首絞めると人生シメるのどっちがよかつたんスカ」

「誰がうまいこと言えと!?!」

その場に座り込みながらツッコむけど、ニコリともしない相手に言っているところかむなし。

まだ文句は言い足りないけど、何を言っても軽く流される気がするので、その場に体育座りする。何か言ってくれるかと思ったけど、静寂が増すばかりだったのでこちらから口を開いた。

「5分持った……?」

首が振られる。……横に。

「大目に見ても3分弱です」

「だよー! あはははは! ……はあ」

強がっておちやらけてみるけど、正直な気持ちが吐息となって漏れ出る。そこまで短いとは思ってなかった分へこむなあ。

……って。それよりも聞きたいことがあるんだ。私の隣にしゃがみこんだ紅暁さんに向かって身を乗り出す。

「ねえ、何であんなまどろっこしい言い方したの?」

「何がです」

気づいているだろうとほけてる。もう、と鼻を鳴らしてから答える。

「ほらほら言ったじゃん。えーっと、『武田と上杉は動きなしで、伊達も変わったことなし。伊達はそろそろここに着く』って。なんでも最初から武田の別働隊が動いてなくて、このままだと政宗と幸村の邂逅シーンが無くなるって言うてくれなかったのさ」

自分の口で言うと、改めてむくむくと怒りが湧き上がってくる。むくれた顔突き出してやると露骨に嫌そうな顔をされた。……少しシヨック。

溜まった灰を指で軽く叩いて落とし、懐に収める。そして紅い切れ長の瞳が、射通すような鋭い眼光を放つ。

「知りたかったんよ。あんたがどの程度、不意の出来事に対応できるか。……まあこつちの世界に来てそれほど経っていませんから、あまり期待してませんでしたが」

一言多いわ阿呆。

「今回の状況をつくったのはオレです」

さらりと紅暁さんが言った。へー、本当に。そうかそうか紅暁さんが……。

ゴロゴロゴロゴロ (しおんのころがるころげき！)

サッ (くぎょうのみきり！)

(ころげきははずれた！)

「危ないじゃないっすか」

「おうおうおう。詳しく聞かせんかいこの諸悪の権化め」

膝を抱え頭を引つ込め高速に回転し、イシ ブテ顔負けの一撃。
しかしあえなくかわされ木に激突。膝を抱きしめたまま横ざまに倒
れ傾いた視界に映る紅暁さんをギツと睨みつけた。

「もうちょっとマシな態勢になってからそういうセリフは吐いてく
れませんか？」

なんかもう清々しく思えるくらいの無表情でため息をつく。この
人の表情はモスクワの氷並みに凍りついているのだろうか。

「……武田の別働隊が動けなかったのは、真田の忍さんと上杉のくのいちさんが偵察中に鉢合わせし戦闘になり、情報の伝達が遅れたからです。……これはオレが仕掛けた事ではありません。おそらくあんたが来たことで発生した『歪み』なんでしょう」

ほう。歪みとはいいい表現だ。

今までの話だと、別働隊が動かなかったことこそが『歪み』のように思えたけど、本当はもつともつと些細な出来事だったんだ。

「ですがそれだけではありません。第一、忍とはいえたかだか一人の人間が帰ってこないくらいで軍の動きが滞るわけありません」

「そういうもんなの？」

「そういうものです」

ふーん。漫画では、一人の動きによって勝負の行方が大きく揺れ動くことがよくあるから、大体そんなもんだと思っていたけど。

「ではなぜか。オレが奴らの斥候等々を見つけ次第縛り上げたからです。上杉も同様に。どちらもさつき解放したのでそろそろ自軍に戻っているとは思いますが」

ゴロゴロゴロゴロ (しおんのころがるこつげき！)

サッ (くぎょうのみきりー！)

(こっぴげきははずれた！)

「くどいですよ」

「黙れい全俺の敵め！てか一発くらい喰らえよバカア！！」

またしても渾身の一撃はかわされ、例によって喬木にふつかる。同じ部位を同じように強烈に打ち、痛みでボタンビツタンのたちまわる。相手はもう清々するくらいのポーカーフェイス。くどいですか？ごめんなさい。

「……………くつ。じゃあ今回のもろもろの事件？は、1割自然発生、10割くぎよさんってことね？そしてその理由は、私がどれほどアクシデントに強いかを知るためだったと」

「割合が少しおかしいことになっていますが、一応そういうことです」

おでこを撫でさすりながらも、なんとか身を起こした。その様子を紅暁さんはただただ見つめる。少しくらい手を貸してくれてもいいじゃん。

……………。

「ねえ」

「はい」

紅暁さんは律義に返答した。

「今回さ。紅暁さんが言った5分、持たなかったじゃん」
「ええ」

「ってことはさ。……………政宗と幸村の邂逅。あれってなかったことになるの…………？」

声が震える。それがずっと、この場まで逃げてから一番に紅暁さんに聞きたいことだった。

……………でも、それも自己中心的な問いかけなんだと思う。

確かにされたことは腹立たしいけど、それでも彼は5分耐え凌ぐというノルマさえクリアできれば、あるべき対面を果たせるよう手を打ってくれていた。そしてノルマを達成できなかった私を、どんなやり方であれ助けてくれた。

歪みを正せなかったという恐怖も、もちろんある。でもそれと同じくらい、ここまで手を焼いてもらって一番に考えることが彼への感謝じゃなくて、あくまで自分のことだということが、情けなかった。

うつむいたけれど、紅暁さんの視線が未だ注がれているのが分かる。次の言葉を聞くまで、恥ずかしくて顔を上げられない。

地面にあぐらをかいていた紅暁さんが、よっこらせというような感じで立ち上がった。私に背を向けたようで、かかとがこちらを向いている。

「見ればわかりますよ」

顔を上げると、紅暁さんは山頂辺りの空を指さしていた。思わず腰を上げて、その方向を見やる。

あ、と。呟いた。

蒼と、紅の、光の帯が見えた。

それらは二重の螺旋を描きながら、高く、高く、天へと昇っていき。

そして。

二つの、いや。

二人の運命が、ぶつかり合った。

「
！！！」

あまりにも激しい、そしてあまりにも運命的な激突に、息を呑んだ。気のせいじゃない。今この時だけ、世界の全てがこの邂逅に歓喜しているかのように、空間が震えている。

「……よかった。……よかった……」

涙腺が緩み、零れ落ちるものを何度も腕で拭う。振り返った紅暁さんが投げかけた声色は、呆れているようだった。

「まあた泣いてんすか。本当に涙もろいっすねえ」
「う、うっせいやい！」

強がって大声を上げるけど、口角が上がっているのが自分でもわかった。ただ嬉しくて、泣きながら笑った。

「来ますよ」

と。

いきなり紅暁さんの顔が険しくなり、苦無に繋がっている紐がピーンと張った。

何の事が、最初は分からなかった。わからないから、螺旋の塔があった場所を、ぼかんと馬鹿みたいに眺めていた。
そして分かった時には、もう遅かった。

金色の光が、爆発が、上空を満たした。
轟音と共に訪れた爆風は、いとも簡単に私の体を吹き飛ばした。

「うおわあああああああああああああああつあああああ
!?!」

とっさに伸ばした両手が太い幹を掴む。しかし安心する間もな
った。

だつて爆発は二段階あつたはず
!!!
二度目の暴風にあおられ、根っこから抜けた木々と共に木の葉の
如く吹っ飛ばされていく。

「うわああああああ読者の皆様ああああああああああ
！！！！長いようで短かったですがありがとうございます
ああああああ！！？」

ガシツと、入れ墨だらけの腕が腰に回る。この腕は！この暴風雨
の中でも香るたばこ臭さは！！

「紅暁さあああああああああん！！！！」
「馬鹿ですねえ。あんたを見捨てるわけないじゃないですか」

無表情でも、確かに感じる頼もしさ。だって彼の右手には巨木に
繋がれた紐が……！！

脇を、何かが恐ろしいスピードで落下した。やはり根っこからもぎ取られた巨木だった。

その太い幹には、漆黒の苦無が深く食い込んでいた。

「…………道連れです」

腕にぐっと力を込めて、そう言って。

絶叫した。意味のわからない言葉を口走りながら、二人で錐もみ
状に落ちていった。

其の伍 渦巻くらせん（後書き）

眠いです。ただひたすらに、眠いです。

活動報告は起きてからにします！おやすみなさい！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7152r/>

戦国BASARA 月の姫の戦場

2011年12月28日03時46分発行